

キーノの旅

へトへト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TVアニメ・オーバーロード第1巻の発売日、2015年9月26日に原作者・丸山くがねさんがTwitterで投下したSugar and spice and
all that's nice。

イビルアイことキノ・フアスリス・インベルンが、ナザリツク大墳墓を伴わず単独で

異世界に転移した主人公・鈴木悟（モモンガ様）と出会ったルート。

その時間軸を下敷きにした二次創作です。

目次

第1話	1
第2話	6
第3話	10
【#10 一緒の香り】	14
【#11 提案】	18
【#12 魔法少女育成】	22
【#13 そこにある喜々】	27
【#14 可能性】	31
【#15 キーノの旅】	37
【# 最終話 オーバーロード 前編】	50
【# 最終話 オーバーロード 中編】	50

72

【# 最終話 オーバーロード 後編】

100

【# エピローグ】

【完結あとがき】

109 124

第1話

【#1 吸血姫】

アンデッドの心臓は動かない。

だが、サトルのことを考えると、動いたような錯覚を覚える。

それも跳ね上がるように大きく。

心の中でサトルの名前を唱えてみる。

恐る恐る、ゆつくりと大事に。

……サトル……サトル……サトル……

呪文は胸にしみ込んで、安心感と共に精神を温かく賦活させる。

この不死の冷たい身体に、失った何かを取り戻してくれる気持ちになる。

それは偶然に発見された、魔力を急速に回復させる方法。

キーノ・ファスリス・インベルンの大切な儀式だった。

【#2 混乱と把握】

喧嘩するほど仲が良いという。

それは鈴木悟とキーノ・ファスリス・インベルンの2人にも相当する。

「サトル（魔法詠唱者）が私に勝てるはずないじゃん

スツといってドス、で終わりなんだからねっ!？」

「ならば答え合わせといこうか？」

先手を取って、キーノの小さな体が男に抱き寄せられた。

仔猫のように腕の中で硬直する少女を微笑ましく思いながら、サトルは顎を金髪の上
に載せる。

「言い忘れていたな。……私は非常に可愛たがりなんだ」

【#3 赤顔の戦乙女】

絶対にサトルは自分の保護者きどりで侮っている。

あの余裕は何だかムカつく。魂的な何かで許せない。

だから後日、キーノは再戦を申し込んだのだ。

スツといつて——小さな唇が硬い骨の感触をつかむ。

「!？」

まるで電撃が全身を貫き、目から火を噴いたようにサトルが狼狽した。

しかし、その動揺も数秒で抑制されて鎮まる。

「冗談でも、女の子がそういう事を……」

言いかけて男は気づいた。

少女は顔を真っ赤に染め、立ったまま気絶している最中だった。

【#4 P V N 前編】

姫を守る騎士なら、誓いと共にずっと側にいてくれる。

でも、サトルは騎士でなく魔法詠唱者。

それも神のごとき、想像もつかないレベルの。

そんな凄い魔法詠唱者が、自分みたいな何も返せない子供のお守りで終わって良いはずはない。

分かっているのだ。

対等な関係なんて、出会った初めから望むべくもない。

この成長しない体は、中身だけは育てていく。

知識・経験・感情——積もり続ける想いと比例する不安。

サトル次第で私はまた独りになってしまう。

【#5 P V N 後編】

子供の姿に乗じたたちよっかいも、どこまで許されるのか試しているのだ。

いつまでも傍に居させて欲しい。

サトル。私は1つ以外は望まないから、どうか……

Pray Vow Near

祈り、 誓い、 近づく —— どうか私を見捨てないで。

「キノノ？」

ローブの裾をつかんだ少女に、サトルがどうした？と首を傾げる。

「私は希少な吸血【姫】。お姫様なんだから、サトルは私を大事にしなさいよね！」

発言とは裏腹に裾を握る手は力がこもり、小さく震えて離そうとはしなかった。

第2話

【#6 キーノの微笑み】

（俺はペロロンチーノさんと違うんだ。

そもそも俺は胸の大きな女性がタイプであって、これは保護欲というか庇護心！

小さな娘に対する父性というか、妹に対する兄の責任感というか……いや、俺には娘や妹どころか家族そのものが居なかったけどな……）

「サトル、どうかしたの？」

「あ、いやほら、俺の手は硬い骨だろう？ キーノを触ったら、痛いんじゃないかと思つて……」

とっさに出た誤魔化しの言葉に、上目づかいで少女が首をかしげる。

「そんなことないよ？ 痛くないし、もし痛かったとしても大丈夫」

「は？」

「だって、サトルに触られるの嫌じゃないもん」

アンデッドのくせに太陽みたいに眩しく、そして温かにキーノが微笑む。

夜と退廃の似合わない吸血鬼。

(神聖属性や炎属性は弱点だから仕方ないか……)
無邪気な信頼はサトルの骨の身に染みた。

【#7 LORD OF THE RING】

「病める時も——ステータス異常しないけどな」

「健やかなる時も——健康的なアンデッドって、ぶぶっ!」

「死が二人を分かつまで——死の超越者(オーバーロード)ですが何か?」

「もおつ、サトル! まじめにやっつてよ!」

「(っ)遊び」

ふとキーノが聞いてきたのだ。サトルの世界はどんな結婚式を挙げるのかと。

(こういう所は、小さくても女の子だなあ……)

もちろん、二人しかいないので神父役も兼ね役だ。

指輪の交換もサトルの持つ無限の背負い袋(実際は無限でない)に眠っていた、何の効果も持たない金貨4、5枚程度の換金アイテムを使用している。

「ね、これもちょうどいい?」

「ああ、別に構わないが、指輪を装備するならこんなオモチャでなく、ちゃんとした付与効果を持つものを——」

偉大なる魔法詠唱者はアイテム鑑定に失敗していた。

この指輪は絶大な効果を持っている。

これから数百年に渡り、吸血姫の想い出を捕らえて、安らぎの中に繋ぎ止める、たった一つの指輪なのだから。

(※これは「キノの旅」と関係ないオマケ。文字数が10000超えないと投稿できないので追加)

【PAD BAD END】

ついに怖れていた時が来た。

第九層にある大浴場の更衣室で、シャルティアは石化を受けたかのように硬直している。

なんだあの胸は？ エルフとは、もっと華奢な種族ではなかったのか？

「あつ、久しぶりだねシャルティア。元氣してた？」

互いの任務のすれ違いでアウラとは顔を合わせない時間もあつたが、それでも1、2年足らずであつたはず。一体、何があつた？

足元が揺れるような不安と引く血の気に、自然と視線が床を向いていた。

震える声を絞り出す。

「……ず、ずいぶんと、見違えたで……あ、ありんすね？」

「ああ、胸のこと？ 先週よりも大きくなつて来てるんだよね。下着のサイズがすぐ合わなくなるから、調整しやすい結びヒモのものにしてるんだよ」

「まっ、まだ成長しているッ!？」

衝撃の余り、敗者からは廓言葉も抜けていた。

時にナザリツク暦112年——かつて魔導王アインズ・ウール・ゴウンが下した「しっかり食べるんだぞ？」の指示は大きな実りを結んだ。

後に話を聞いたデミウルゴスは「さすがはアインズ様」と感嘆したという。

第3話

【#8 BIRTHDAY 前編】

私の誕生日はいつになるのかな？

人として生まれた時？

それとも異形となり、心臓が鼓動を止めた日？

そもそも成長しない身体に、誕生日なんて意味はあるのかな。

そう呟いて黙り込んだキーノに、困ったように見ていたサトルが口を開く。

「誕生日ってさ、プレゼントやご馳走じゃないよな。俺は……祝ってくれる誰かが居てくれるだけで良いよ」

詳しくは聞けていないが、サトルは自分と同じくらいの年には独りだったという。

口が重い様子を見るに、幸せな時間ではなかったのだろう。だけど、サトルと同じという点が少しだけ心を晴らす。

「じゃあ、私が祝ってあげる。サトルの誕生日はいつなの？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」五日前だったような？」

「……………」

唐突なサトルの爆弾発言に「なぜ黙っていたのツ!？」と少女が怒り狂い、数日かけて機嫌が落ち着く頃に吸血姫は1つ歳を重ねた。

【#9 BIRTHDAY 後編】

異世界の少女キーンと旅を続けて、早くも一年が経とうとしている。

茶釜さんの腕時計が無ければ、流れた時間もあやふやになっていただろう。

そんな時だった。

誕生日の話題で彼女の機嫌を損ねてしまったのは。

自分の誕生日に思い入れがない。

そう答えては、少女が迎えるその日も否定してしまう。

(プレゼントは用意しておいた方が良いだろうな。

しかし、この年頃の娘って何が良いんだ？

こんな事ならギルドの誰かに聞いておけば良かった……)

何か欲しい物はないかと聞こうにも、先日の件で機嫌を損ねてしまい取りつく島もない。

さんざん悩んだ挙句、用意したのは――

「……赤い服？」

「ROBE of SALAMANDER。炎に耐性を持つ火蜥蜴を素材にしたローブだよ。

アンデッドは炎が苦手だろう？」

サイズが大き過ぎると思われたが、袖を通すとローブは収縮して丁度よくなった。

魔法の衣服なのだ。

(……サトルの匂いが少しする)

吸血鬼の鋭敏な嗅覚が、遠い昔の持ち主を伝える。

彼が今よりも未熟だった頃に着用していたのだろう。

そんな昔の持ち物を大事に取ってあるサトルの貧乏性が、今も変わらないことが可笑しくて。

彼の過去を共有するかのようになり、プレゼントとして譲り受けたことが嬉しくて。

包まれている幸せに少女は赤くなる顔を隠した。

この火蜥蜴のローブ、ちよつと熱い。

だから仕方なく涙で顔を冷やすのだ。

【#10 一緒の香り】

拠点のない旅はつらい。

水分摂取の必要ない体だから、水場にありつけない日々が続いたある日。

「……サトル、ちよつと臭うよ?」

ここでキーノもだろう? と返す程サトルは愚鈍では無い。

大泣きされて、デリカシーない! と罵られる予測ぐらいはつく。

だから、考えを切り替える。本当に臭うのか?

アンデッドは腐った死体から死霊まであり、骨だけの自分は臭いランキングでいえば下位のはずだ。

そこまで臭くない臭くな……まさか加齢臭!?

俺そんな年じゃないはずだけど……ああ、伝え聞いた父親が思春期の娘に「パパこつち来ないで!」と汚物扱いされるのは、こんな感じか。

不意打ちのダメージに落ち込むサトルを見て、今度はキーノが狼狽する。

「わっ、私サトルの臭い嫌いじゃないよっ!?!」

「いいんだ、気を遣わなくて……」

腐敗しなくても空気に混じる粒子の流れで臭いは生じる。敵密に言えば無臭は存在しない。

虫や動物よりも人間の嗅覚が鈍いだけで、空気にすら臭いはある。

吸血鬼は嗅覚が鋭敏過ぎるのだ。

空気で動いた粒子レベルで、キーノがサトルの『ささいな』臭いを言い当てたのは、こうも言い換えられる。

彼女はサトルをずっと気にかけていたのだと。

サトルの臭いが変化した理由。

答えは簡単だ。サトルに着いていた別の臭いが薄れたから。

世界で最も気にならない臭い——それは自分自身の臭いであり、サトルの衣服からキーノの臭いが薄れた（相手を意識する余り、少女が以前より距離を取った）為、サトル本来の臭いが感じられたのだ。

『……サトル、ちよつと臭うよ?』

『わつ、私サトルの臭い嫌いじゃないよっ!?』

無意識に出た少女の発言は、相手から自身の臭いが薄れた不満と、相手の臭いを意識した好意の訴えに他ならない。

慌てたキーノが弁解を口にして近寄ってくる。

こんな小さな子に気を遣われるのも情けない。年長者として余裕のある振る舞いをするようにしよう。

「ほんとに本当に、サトルの臭いは嫌いじゃないからっ！」

「……ありがとう。俺もキーノの臭い好きだよ」

うへっ!! と奇妙な声が上がった。

続いて「こつち来ないでっ！」と叫んで後ずさる姿に少し傷つく。

自分も臭う可能性に気づいたのだろうか、こちらが拒否られているようで悲しい。

ペロロンチーノさんなら少女からのご褒美と喜ぶかもしれないが、想像してみるといい。

ゲームの理想とは異なるリアルの無情を。

仕事を終えて帰宅すると労働の汗を臭いと言われ、風呂で流そうとすると「お父さんが入るのは最後でしょう! あと洗濯は一緒にしないで!」と非難される世の父親たち。

娘を持つ友人——たつちさんの未来に心配を抱いた瞬間、キーノが腰袋から何かを取り出して振り撒いた。

ポーシヨン? いや違う。これは……香水か?

この世界で香水は金貨3枚の価値がある——平民の家族3人が1ヶ月は暮らせる—

—高価な品だ。

キーノは貴族の出身とは聞いていないし、どうしたのだろうか？

「私が自分で作ったの。魔法の実験の産物だけど」

「キーノって魔法開発の才能があったのか……」

魔封じの水晶と同じ性質を持つ水晶の瓶——キーノは水晶を限定にした宝石特化タイプの世界線エレメンタリストを修行中らしい——に封じ込めた低位魔法。

別の世界線では、この香水こそが白い霧（もや）を放つオリジナル魔法（蟲殺し）の開発に繋がるのだが、サトルの保護力が強すぎて蠅の魔神対策が起きない為、この世界では至らなかつたり。

キーノが説明をする。

香水は体温によって匂いに変化し、その違いを楽しむもの。

同じ香水を使っても、人によって香りの印象が異なるのは体温の差異があるからだと。

「でも私たちはアンデッドだから、ずっと一緒の香りだよ！」

体温のない不死者なのに、少女の言葉でサトルの胸が温かくなる。

旅はまだ続く。離れていた距離を詰め、二人は手を繋いで再び歩き始めた。

【# 1 1 提案】

誰も傷つけないようにしたのが裏目に出た。

辿り着いた街でサトルと二手に別れ、互いの買物物を済ませようとしたところ、店先で服が破れたことから吸血鬼であることが発覚。

冒険者や警備の兵を相手にしているところに、スレイン法国の神官が来たのだ。

浴びつけられる罵声。

邪悪な存在が退治されることを期待して、遠巻きに観戦する野次馬。

正義は自分たちにあると信じて疑わない排除の意志が悲しい。

この街で私たちが何をしようの？

キーノの内で巡る感情は、悲しみなのか怒りなのか自分でも分からない。

混乱が隙になったのか。

アンデッドである身に神聖魔法は分が悪く、動きが止まったところを取り囲まれた。

足をすくわれて転倒。

吸血鬼の種族特性で物理耐性を有し痛覚が鈍った肉体ゆえ、武器で打たれても痛みはないが、魔法で自由を封じられて声すら出ない。

サトルは分かっている。

ものごとには大義名分が必要なのを。

それに女の子が男の人に服でねだって良いのは花嫁衣装だけ。

サトルの世界は違うのかもしれないが、日常の服は自分たちで縫い作る。

母から娘へ作り方を習い伝えるのが庶民では普通だ。

でも、人の道から外れた自分は普通じゃない。

母を失った娘は術すら持たない。

だから古くなり過ぎたら、貴族たちのように金を支払って買う必要がある。

以前サトルからは誕生日に火蜥蜴のローブを貰ったけど、これは大事な一張羅だから

普段着にはできない。

我がままだとは思わないで欲しい。

吸血鬼だけど私だって歳相応なんだし、破れから肌が見えて恥ずかしいのは、その

……サトルが……

うつむき黙り込んだキーノの頭に、骨の右手が乗せられる。

仕方ないなど、しぶしぶの同意を保護者から貰い、少女は後日私物をひとつ増やした。

手に入れたのは赤い服。

血を連想させ、吸血鬼である事を責められるようで嫌いだった色。

でも、誕生日のローブで今はお気に入りになった、私を飾る色だ。

【#12 魔法少女育成】

シヨ・ガ・クウオー。

かつてサトルが元の世界で学んだという、貧しい者が属する事は難しい大金のかかる
国家機関。

その話を聞いてキーノは納得した。

才能ある者しか学べない魔法詠唱者の師弟塾。

優れた血筋を集めるスレイン法国の神官組織。

世界が異なっても同じものだ。

サトルの操る高位階な魔法も、シヨ・ガ・クウオーで育成された結果なのだろう。

強力な術者が優れた教師とは限らない。

しかし、目の前に居て言葉が届き、術理を得る機会があるのなら学ぶべきだ。

(サトルが師匠……………一番弟子……………愛弟子って「愛しい」弟子だよね)

少女の内に情熱と意欲が湧いてくる。

その反応もまた、世界が異なっても同じものだ。

「えっ？ 魔法を俺から学びたい？」

こくこくと首を振る様は可愛らしいが、少女への返答に困る。

プレイヤー鈴木悟の魔法はDMMO—RPGシステムの恩恵であり、教育でどうこう出来る類ではない。

この世界に転移したら、自然と扱えるように変化していたものだ。

「お願い！ 私ね、真面目に教わるよ？ サトルががっかりしなように頑張るからっ！」

「うーん、でも魔法で教えるようなこと……」

「何でも良い！ サトルみたいな魔法使いになりたいの！」

そこまで言われると悪い気はしない。

「……分かったよ。じゃあ、キーノが今唱える事ができる魔法を全て教えてくれ」

「いいけど、そんなに多くないよ？」

「構わない。むしろ少ない方がベストだ。ただ、新しい魔法はキーノが自分で覚えること」

「えっ、サトルは教えてくれないの？」

「ああ、俺が教えるのは——」

サトルが不敵に笑った雰囲気をもとう。

「ガチ構成の指導と魔法の使い方だ」

今の鈴木悟の財産。

その1つはアインズ・ウール・ゴウンで過ごした日々だ。

自身は死霊魔法の使い手だが、メンバーには錬金術師や神官など異なる1000レベルが所属し、様々な魔法を目にしてきた。

悟よりも強力な魔法詠唱者もいて、彼らの隙のない魔法選びの構成を覚えている。そして魔法の使い方。

『誰でも楽々PK術』や『PVP』対策など、攻守に渡る戦闘術。

隙のない構成をする者にすら勝利を収めた、自分よりも性能に優れた者を打倒する工夫。

基本から応用までサトルはキーノに伝授する気だった。

それがどれだけ怖ろしいことか、サトルは気づいていない。

恋慕という鎖に繋がれた少女は『褒められ』『認められる』『喜びゆえに、愛しい人の血を吸うがごとく真摯かつ貪欲に吸収する。』

ただでさえ吸血姫という希少な剣がより錬鉄され、研磨された鋭さを帯びるのだ。

二百年後——

ある意味アインズ・ウール・ゴウンの後継とも言うべき、魔法戦闘術の結晶が完成す

るのだが、それはまた別の物語。

「オーバーマジック魔法上昇〃、何それ？」

「サトル知らないの？ 本来は使用できない位階を発動できる、魔法の強化術だよ。魔法の消費が激しくなるけど……」

ユグドラシルになかった未知の魔法。

他にも聞いたことのない魔法の名前がキーノの口から語られる。

その多くが<絶望のオーラ>のように、元の世界では使えない効果だ。

しかし、この世界では有用という逆転現象が面白い。

(……香辛料を作る魔法ねえ。錬金術師だったタブラさん辺りなら目潰しとか、粉塵爆発に用いそうだな)

師が弟子を育て、弟子もまた師を高める。

独学では限界があっても、人は他人と触れて教え教わり、過去を振り返っては新しい発見を得る。

独りでなく二人だからこそ。

鈴木悟が出会った異世界の少女は、いつも新たな刺激を与えてくれる。

まるで香辛料s p i c eのように。

そういえば大昔の地球では、香辛料が黄金の価値だった時代があったという。

自分にそう話してくれたのは、ギルドの誰だったか？

懐かしい面々に思いを馳せるサトルを、黄金の輝きを宿した頭を傾けて少女が不思議

そうに見つめていた。

【#13 そこにある喜々】

「私が今唱えられる魔法を教えただけど、そういえばサトルはどれくらい使えるの？」

「俺？ 全部で718だぞ」

「なっ……!？」

ユグドラシルの総魔法数は軽く六千を超える。

サトルの中では自分の使用魔法は総数の約10%という感覚だが、通常100LVプレイヤーが習得できるのが300だから、はつきり言つて数がおかしい。

プレイヤーでは上の下という自己評価も、実際は疑つても良い話だ。

上の上プレイヤーは約500人とも言われている。

死霊系の魔法職でごく少数しか就いていない希少クラス『エクリプス』を持ち、全魔法職でも5%しか使いこなせない魔法コンボを操る技量。

フル重度課金に加え、仲間にも恵まれたギルド長という立場もあり、全身を神器級アイテムで統一しながら世界級すらも装備。

神器級の装備を1つも持たない100LVプレイヤーは珍しくはない。

それだけ製作に労力が掛かるからだ。

さらにそれ以上に貴重な世界級アイテムの数は200——個人装備として考えても、サトル以上のプレイヤーが約500人（さらに上の中も加わる）も居るわけがない。（たつちさんやウルベルトさんに比べたら、俺なんて弱いからなあ……）

たつち・みーは全プレイヤーで9人しかいない、戦士職最強クラスのワールド・チャンプイオン。

ウルベルト・アレイン・オードルは『アインズ・ウール・ゴウン』において、魔法職最強のギルドメンバー。

そんな2人を平然と基準にする——サトルの認識が異常にハイレベルなことこそ、上の上プレイヤーの証でないだろうか？

習得魔法数718。

この世界では1つの魔法を習得するのに3〜5年かかることも珍しくはない。仮に大天才で半年で1つを覚える計算でも三百年は超える。

寿命のないアンデッドだとしても、気の遠くなるような時間が必要だ。

「……凄すぎて、私じゃなかったら信じない数だよ」

「へえ、キーノは俺のこと信じてくれるんだ？」

「うん。サトルのことなら信じられるよ」

ごく普通に何でもない事のように言われたから胸にズシンと来た。

卑怯だと思う。

金髪の綺麗な女の子が、見返りも保証もなく信頼を預けてくるなんて。

本当に卑怯だと思う。

うれしく思う以外に選択の余地が無くて、それに応えるしかないじゃないか。

今日は魔法の話はおしまい。

日も暮れてきたので、二人は協力して野営のテントを準備し始めた。

アンデッドは疲労や睡眠とは無縁で休まずに活動できるが、魔法詠唱者として精神力の回復は必要だ。

夜行性の多い野生のモンスター相手に魔法を使って消耗するより、安全に過ごす方が理に適っている。

もつとも、種族として二人は暗視スキルを持つゆえに明かりはなく、キノが独りで食べることを嫌がるので温かな食事もない。

(飲食不要のアイテムのこと、話したのは失敗だったなあ……)

出費が浮くし、サトル料理できるの？ という質問に撃沈されたのもあるのだが。

食事もなく、灯りも暖もなく、睡眠もない。

ただ――

「おいで、キーノ」

「お、おじゃまします……」

いつも畏まるキーノの返事を微笑ましく感じつつ、気持ち的にローブにくるまり、肩を並べるように寄り添うだけ。

万が一に備えて接触発動の魔法が使えるように。

緊急の空間転移も選択できるように。

誰かが側にいる実感を味わうように。

ぼんやりとキーノの耳赤いなと思いつつ、サトルは彼女の頭に手を差し伸べた。

食事もなく、灯りも暖もなく、睡眠もない。

ただ――

かみ砕くようにゆつくりと言葉を交わして

眩しい笑顔に温かくなりながら

夢のある話で夜を明かすことはできる。

【#14 可能性】

塩や『水晶』（低温型石英）など、結晶性物質に圧力を加えて変形させた時、その変形に比例した電流が流れる現象を圧電現象（ピエゾ効果）という。

逆に結晶性物質に電流を流すと、その強さに比例して物質の変形が生じる。

この現象は圧電気といい、結晶性物質だけでなく『骨』や木材などの生体物質でも確認されている。

水晶は効果的な圧電体であり、電撃魔法との相性は抜群なのだ。

媒介させることで電撃を強化し、逆に水晶の種類によっては絶縁性を発揮する盾となる。

キノのような水晶に限定特化した地属性エレメンタリストは、是非に電撃魔法を覚えるべきである。

（※ Web版のイビルアイは切り札魔法が第五位階の電撃魔法<ドラゴン・ライトニング 龍電>）

「アンデッドも電撃には縁があるものらしい。継いだ死体が雷によって動き出した話を聞いたことがある」

「サトルは物知りだね」

「ホラー好きな人が仲間にはいたんだ」

「えっ、ホラ話なの？」

キーノは見逃さなかった。

仲間と口にした瞬間、サトルの雰囲気や和らぎ、そして一抹の寂しさを交えたのを。女の人だろうか？

もやもやと嫉妬めいた感情が生じたが、確定するのが怖くて詳しくは聞けない。だから話をすりかえるように、雷で動き出した死体の話をせがんだ。

※ ※ ※

『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』。

これは1818年にイギリスの女流作家メアリー・ウルストンクラフト・ゴドウィン・シエリーに執筆された。

一般では『フランケンシュタイン』で知られる小説は、科学者志望のスイス人の青年・ヴィクター・フランケンシュタインが創造した、名前のない怪物を巡る物語である。

人間を超える体力と知性、そして心を備えた怪物は、醜い容貌の為に創造主に拒絶され、他の人間たちにも迫害を受ける。

孤独な身を嘆いた怪物は創造主に自身と同じ存在——伴侶の創造を求め、願いかなえて貰えば二度と人間の前には現れないと誓う。

しかし、青年フランケンシュタインはこれを拒否。

絶望した怪物が創造主の妻や友人を殺害した為、青年は復讐心をもつて怪物を追跡する。

その途中、北極海で青年は遭難し、北極探検隊に拾われたが衰弱して息を引き取る。

彼の最期を看取った探検隊の隊長の前に怪物が現れる。

創造主の死を嘆いた怪物は、北極点で自らを焼死するべく姿を消すのであった。

※ ※ ※

(タブラさんに聞いた話じゃ、映画は無口で暴れん坊な怪物だけど、原作だと複数の言語を数ヶ月でマスターし、弁が立つ存在なんだよな。

容姿が醜いだけで迫害されるって、今の俺も身につまされ——ってアレ?)

やけに静かと思ったら、キーノが全開で涙目だった。

創造主にすら拒絶された名前のない孤独な怪物。

人間から忌み嫌われる存在は、キーノも思う所があつても不思議じゃない。

「おいで、キーノ」

「……………」

涙をこらえるので懸命なのだろう。

恥ずかしかることなく、無言で素直に寄ってきた少女を迎えて、ローブの袖を彼女の目元に当てる。

それをキーノが受け入れて、顔をサトルの衣服にうずめた。

押し殺したような嗚咽と鼻をすする息遣い。

名前のない怪物のように人の心を持ち、人間からの拒絶と孤独を背負う存在は、心もとないただの少女だった。

「……………さんがいたら……………」

「んっ、なに?」

「……………お嫁さんを創ってもらえたら……………幸せになれたのにね……………」

実際はどうか分からない。

その後、数百年の間に二次創作として製作された映画や小説の中には、花嫁が怪物の醜さのあまり逃げ出す展開もある。

美女と野獣のように相思相愛とは限らない。

でも起きなかつたことは、孵化しなかつた卵であり、全て眠っている可能性だ。

温かで優しい夢であつても良いだろう。

「ああ、きつとそうだな」

「ねえ？ もしもサトルが創造主だったら怪物さんに何て名前をあげる？」

「そうだな。俺だったら——」

直後、雰囲気は一変。

サトルの名誉の為に詳細は伏せておくが、キーノは怪物が名前を拒否する場面を想像し、涙が引つ込んだという。

こうして少女の悲しみは霧散した。

決してサトルが望んだ形ではなかったが。

最後に余談をひとつ。

もし二人の会話をホラー・マニアのタブラ・スマラグディナが見ていたら、奇縁に微笑んだに違いない。

特に少女を見て。

『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』。

この小説が誕生したきっかけは、作者メアリーを含む5人の男女が創作を披露し合ったディオダディ荘の怪奇談義（1816年）であった。

同じくこの怪奇談義をきっかけに、参加者ジョン・ポリドリにより執筆された作品がある。

タイトルは『吸血鬼』（1819年）。

有名なブラム・ストーカー作の『ドラキュラ』（1897年）に先駆けて、世界で初めて吸血鬼を主人公に置いた小説である。

【#15 キーノの旅】

アンデッドは食事を摂らないといっても、旅路で人里に辿りつく度、寄っては必要なものを補給する。

魔法の触媒や身の回りの消耗品。

道行きの地図や次の街への情報——そして、時には要らない知識も。

町で用事を済ませ出発した後、夜露をしのぐべく森の中で魔法のコテージを展開した時だった。

アンデッドであるサトルとキーノの夜は長い。

眠らないからこそ、語らう時間はたつぷりとある。

「あのね、話があるの」

神妙な様子でキーノが切り出した。

視線がチラチラとサトルの方に行ったり来たりしてたが、ようやく決心がついた感じだ。

それでも思い詰めたというか、ためらいが見え隠れしている。

なんとも不穏な雰囲気サトルは「どうした？」と身構える。

「怒ったりしないから正直に答えてね」

ああ、この言葉は信用ならない。

『絶対に損はさせません』

『アットホームな会社です』

これらと同類で要注意な決まり文句。

だから、キーノが怒ることを覚悟しておいた方が良くもしいれない。

「……男の人は……お、大きいおっぱいが好きなんだって！」

「は？」

サトルの顔に血肉が付いていたら、何を言われたか分からないという表情を象つただろう。

幸いにして骸骨の顔は平静に見えた。

精神抑制が働いてスウーと発光していたが。

「……………そのっ、ねっ、ねえ？ サトルも好きなの!？」

サトルの精神抑制がもう一回発動。

表情がないからこそ、惘然していると勝手に思い込んだのだろう。

自身の発言を振り返り、少女は顔を伏せた。

(……あ、赤面したキーノも可愛い。

元が白い肌だけに、羞恥で赤く染まる様が際立っている。

自分の発言によるバツク・ファイヤ。

うんうん、可愛いな。

おっと、こっちの視線から自身の赤面に気づき、さらにレッド・コンボ達成だ)

——と、少女の観察による現実逃避は良くないなど直ぐに反省をし、サトルは少女に向き直った。

どこで耳にしたのかと相手に問いて、対応を考える時間を稼ぐ。

何でも買い出しで街を歩いていた際、井戸端会議でおかみさん連中が話していたのを耳にしたらしい。

「キーノ、いいか？」

「う、うん」

「アンデッドはおっぱいを飲まない」

よし、切り抜けた！ とサトルは内心でガッツポーズを取った。
これはきつとアレだ。

子供が大人に聞く「赤ちゃんはどこから来るの？」と同レベルの質問だ。

深い意味など無く、好奇心や知識欲から発せられたもの。

こういうのは直球の正解でなく、広めに方向性を与え、本人を思考させることで結果として満足させれば良いのだ。

何から何まで答えては、自主性も成長も養われない。

あるいは時間が経てば、おのずと得られる答えもある。

「じゃあ、サトルは嫌いななの？」

「……………（スウー）」

激しい動揺が強制的に鎮まる。

逃げられなかったか。

先日からキーノに伝授し始めた、ぷにつと萌えさん考案PK術の教えが発揮されているのかも。

獲物は逃げ切ったと安心した時に最大の隙を作る。

さつそく実践するとは……アンデッドの精神抑制が無かったら危なかったな。

しかし、これはどうしたものか。

彼女の質問は両刃の剣。

あるいは周囲が地雷だらけの罠だ。

身体の成長の止まった少女の姿を見て、サトルは深く考え込む。

好きと言えば、胸の無……つつましい彼女の尊厳を傷つけ、あるいはイヤラシイと軽蔑されるだろう。

嫌いと言えば、その理由を問われるのは必至。下手したらズルズルと質問が続き、泥沼化しかねない。

好きでも嫌いでもない……それは今後、何かの拍子で傷になる問題が起きそうだ。

キーノとの旅は続いていくのだから、彼女を傷つけるような不安要素の種は撒いておきたくない。

正解は何だ？

余りの窮地に思わず、答えは何処へー！ と叫びたくなってしまふのは気のせいかな？

スウー……

ああ、精神抑制がまた発動。

いつの間にか、いっぱいになっていたらしい……おっぱいの問題だけに。

これは元の世界でも理不尽な選択だ。

小さいのが好きと言えば、ロリコンや変態の軽蔑にさらされ

大きいのが好きと言えば、マザコンや助平の叱責を受ける。

おっぱいが嫌いな男性がいないように、「おっぱいが好き」と主張する男に好感を抱く女性はいない。

いや、恋人や夫婦の間でならあり得るのかもしれないが、残念ながらサトルには無かった経験だ。

それに社会人だった時代は営業職として、普段からセクハラ発言を口にしないよう習慣づけていた為、普段から性的なことや下ネタをいう方ではなかった。

会社の同僚や顧客、ギルドにいた3人の女性メンバーに対してそうであったのに、目前にしているのは13歳くらいの姿をした少女。

はつきり言って、元の世界なら警察に通報されるレベルだ。

サトルは内心で頭を抱え込む。

キーノとこのような色めいた会話——この時点で、そう意識しているのはサトルの方だけだ——は初めての事態ゆえに。

彼は気づいていない。

この時点で少女を『子供』でなく、『女性』という視点で扱っていることを。

今の光景をサトルの友人であるギルドメンバーの姉弟——それぞれ、秘密ボイスとエロ画像をサトルに渡した二人——が見ていたら、こう思ったに違いない。

姉 「モモンガさんは紳士だからねえ」

弟 「モモンガさんは真摯だから」

姉弟 「だからみんな、いつだってモモンガさんを信頼する」

※ ※ ※

珍しくサトルが返事を詰まらせている。

彼を困らせるつもりはなかった。

ただ聞きたかったのだ。

『男の人は大きいおっぱいが好き』

人は自分に無いものを他人に求めるといふ。

そう考えると、胸の平らな男性が乳房を持つ女性に惹かれるのも解かる気がする。

一般的に大きい胸が好まれる傾向があるようだ。

もう成長することはない、平坦に近い自身の隆起。

サトルが大きい胸を好きでも構わなかった。

彼が私へ持つ感情は、私が抱くものと違うことに薄々気づいていたから。だからそれ以前の問題。

自分を一人の異性として好きになって欲しい。

でも、どうやったら好きになってもらえるのか全く分らない。

手料理？ サトルは食事不要だ。

お金？ サトルは高価で貴重な品々をいっぱい持っている。

魔力も、魔法も、知識も、力も、サトルはすべて備えている。

うん、私とは正反対。

私はサトルに一つを除いて何もできない。

ただ、もらってばかり。

サトルにとって私は庇護の対象に過ぎないから、この後の展開も予想は着く。

何を言われるのか分からないけど、行動だけは予言できる。

子供にするように私を抱きしめるか、頭を優しく撫でるのだ。

そうされるのは不満なくせに、私の心と身体は勝手に熱く高鳴って喜ぶ。

赤くなるな、視線よ下がるな、言う事を聞け私の身体！

そんな抵抗を見てサトルは喜ぶ——たった一つだけ、私が彼にできること。

一方に大きく傾いた天秤に乗る大人と子供の関係。出来るのなら、彼の余裕を崩したい。

至高に立ち向かうような諦観を抱きながら、私は彼が手を伸ばすのを待つ。

こちらの想いは届かないのに、彼の手は私へ気軽に届くことを理不尽に感じながら。最初の頃は頭を撫でてもらえるのがただ嬉しかったのに、なんで不満に思うんだろ
う。

私は笑う。

アンデッドって身体は成長しないのに、精神こころは変化するんだ。

私は嗤う。

いや、アンデッドに相応しく醜い精神こころになっただけか。

サトルは私とは正反対。

アンデッドらしく精神こころも出逢った時から変わらない。

常に落ち着いていて、頼れる大人の対応。

サトルは子供の私とは正反対。

心なしか私の目にはサトルの姿が輝いて見えた。

(スウー)

※ ※ ※

決して相手が納得するような言葉ではないことは確かだ。

観念してサトルは口を開いた。

「……触ったことがないから解からない」

何を？ と一瞬きよんとした後、キーノの顔に理解の色が広がっていく。

ゆつくりと、じわりじわりと。

『怒ったりしないから正直に答えてね』

こみ上げてくる感情に、びくびくと震える小さな頬。

微かに上がる口の端。

緊張を軟化させるキーノに対し、硬直石化するサトル。

正直に答えるべきでなかったか？

思案顔で黙り込んだ彼女の反応が理解を超えるもので、サトルの不安と恐怖を煽る。

「サトル、手を出して」

「？ とうか？」

「えいつ」

「!?!」

キーノがサトルの手首をつかんで引つ張った。

白骨の手のひらに押し当てられた、微かな膨らみ。

永遠に止められたつぼみは、不死者であるがゆえに鼓動が邪魔をすることなく純粹な胸の波を伝える、体温のない新雪の触れ合いだ。

変化が微かだからこそ、かえってサトルの感覚に刻まれた。

「えへへ、サトルの初めての相手は私だね」

「にや、にやにをっ!」

「サトルのえっち」

「手を引つ張ったのはキーノだろうっ!」

「うん、そうだよ」

悪びれずキーノが肯定する。

嬉しそうな様子に理解が追いつかない。

スウーーーーースウーーーーースウーーーーー!!!

精神抑制も追いつかない。

上から目線で笑う彼女は、幼い姿に反してドキリとする妖しさがあつた。

いつもの陽の明るい笑顔でなく、月の光のような柔らかく闇に合う——
恋する乙女ではなく、獲物を手中に収めた女狩人アルテミスのような——
もしサトルがキーノに対し、そう見えると言ったら彼女は噴き出しただろう。
なぜなら精神抑制が連続するサトルの方こそ、燐光を放つて満月のように輝いていた
のだから。

※ ※ ※

かくして吸血姫は、望みどおりに至高の牙城を崩した。

堅く閉ざされていた精神の堤に蟻の穴ほどのほころびが生じる。

大きな喜びの影で、じわりじわりと流れ始めた。

あふれ出さんばかりの堰き止められていた想いが。

鈴木悟ではない。

今まで溜め込んでいたのは、キーノ・ファスリス・インベルンの方。

明確に示した好意。

ほころびの生じた歯止めにも、彼女はこれから苦悶することになる。血肉を持たない者に対する吸血衝動にも似て。

それは心身を焼く責苦に等しい、永劫たる至高との戦い。

成就しない愛は、目的地のない旅のようなもの。

歩いてきた足跡かこすら見え、――先みらいを見通せない霧に彷徨う『キーノの旅』。

彼女は初めて、己の『吸血姫』という状態を自覚することになる。

アンデッドに相応しく、満たされたい欲求に飢えを抱いて。

【# 最終話 オーバーロード 前編】

日が暮れ始めた時刻、魔法のコテージの一室。

大好きな人が触れた小さな胸を押さえながら、キーノは今日も儀式を執り行う。

魔力を急速に回復させる方法。

詠唱する呪文の綴りは『サトル』。

いつも温かな安心感を覚える儀式は、今日に限って反応が違った。

回復どころか怖いくらいに魔力は高まり、溢れんばかりに動かない心臓で集結して渦巻く。

何かが違った。

何かは解からない。

キーノは違和感がぬぐえないまま、一人で部屋に籠もって過ごすことにした。

サトルの名を唱えて起きた魔力の上昇。

本人を前にしたら、何か起こりそうで不安だったからだ。

コテージでサトルと一緒にでないのは久しぶりだ。

不意に生まれた一人の時間。

いい機会だ、気持ちを整理して落ち着かせよう。
備え付けの寝台に寝そべり、これまでの日々を思い返す。

.....

.....

.....

.....

.....

.....サトルが大好きだ。

彼のいない世界など考えられない。

幸いなことに、相手も自分も不死者の身だ。

死さえ二人を分かつことは出来ない。

望めば望むだけ、この先も永遠に楽しい日々は続くだろう。

吸血鬼になって良かったと思える日が来るなんて想像すらできなかった。

大いなる災いの中の、たった一つの幸い。

いや、今となつては全てが幸福と言つていい。

横たわつたまま宙に手をかざす。

視界に入ったのは、左手の指で光るオモチヤの指輪。

サトルのいた世界の結婚式を教えてもらった時の品だ。身を起こして、着ている赤い衣服のフードを被った。

誕生日にプレゼントされた火蜥蜴を素材にしたローブ。

微かに残っていたサトルの匂いは薄れ、今では彼にあげた香水の香りがした。この身を包む全てはサトルのおかげだ。

今でも十分に幸せなのに、これ以上を望むのはワガママだろうか？

「……サ、サトルの……お、おっ、おおおお嫁さんに……」

声に出して耐え切れなくなり、ゴロゴロと寝台を転がる少女。

彼がいてくれるのなら他に何も要らない。

そう思える程、キーノは恋の魔法に陥っていた。

アンデッド特有の精神の完全耐性が嘘に思えるくらいに。

その夜、異変が起きた。

……何で……だろう……？ ……喉が………渇………く………

当初キーノは気のせいだと思った。

サトルから飲食不要のアイテムを借り受けて装備しているから。

病気だろうか？

念の為にサトルに魔法で診てもらったが、ステータスは正常だと言われた。確かに正常かもしれない。

むしろ渴き以外は正常というか、心身が活性化しているような感覚さえある。心配げなサトルに「大丈夫か？」と問われて肯定の返事を返した。

喉の渴きも我慢できない程でもない。

サトルがキーノの額に手を当てて、首を傾げる。

「ステータスは正常なんだが、何だか熱っぽくないか？」

顔が赤いのは、きつとサトルの距離が近いからだ。

額に押し当てられた手も、ちよつと前に自分の胸に触れたものだし……。

動かないはずの心臓がドキドキとして、鋭い嗅覚がサトルの臭いをとらえる。

もしかして私、サトルに興奮してるのかな？

はしたないと、サトルに嫌われたりしない？

ぐるぐると思考が回って、小さな頭は熱暴走で処理を放棄しそう。

その様子に不安を感じたサトルがさらに距離を近づける。

キーノの目を覗き込み、光をうかがうサトルの顔が近い。

脈絡もなく、ふと『キスしたいな』と想いが浮かんで、キーノは自身の衝動に硬

直す。

高まって言葉にならない思考と感情。

緊張と困惑で、もつと喉がカラカラに渴いた。

渴きは夜が明けるまで続いた。

もちろん、ステータスは正常なのだ——吸血鬼としては。

※ ※ ※

元々キーノは我慢が強い方だ。

ただ、泣き虫なだけで。

サトルと出会うまで、死者が徘徊する廃都で独り過ごした時間があつたから、耐えることには慣れてる。

それでも夜な夜な湧き上がる喉の渴きには、さすがに心の平穩を乱されずにはいられなかつた。

水やスープでは癒えない欲求。

一週間も苛まれば、気づくこともある。

渴きは決まってサトルが視界に入ったり、他の五感で彼の存在を感知した時に限って

だ。

迷惑はかけられない。

無意識の想いが、サトルを避けるように距離を取らせる。

彼に触れないように。

彼の姿を視界から外すように。

彼と過ごす一緒の時間を減らして。

しかし——

いったん『好き』と自覚して行動した以上、相手を想うことは止められない。

昼間に離れた距離と時間を埋めるように、夜間に訪れる渴きは激しさを増す。

サトルとは別の寝台の上で。

「……………ツ……………フウ……………」

苦悶の呻きをサトルに聞かれたくなくて、唇に自身の二の腕を押し当てた。

気を紛らわせなければ。

目蓋をきつく閉じ、彼の姿を想像して想いを込めた『キス』をした。

いつか来る日の為の練習だと、自分を励まして。

瞳をそつと開いて愕然とする。

少女の二の腕には、自身が強く噛んだ歯跡が二点だけついていた。

この時、キーノは身に起こっている異常の正体を悟った。

夜に訪れる渇きの正体。

サトルという存在に結びつく欲求。

『キス』と二つの牙の跡。

少女が嗚咽を漏らす頃には、吸血鬼の持つ高速治療の特性が腕から歯跡を綺麗に消し去っていた。

※ ※ ※

余談だが、『アンデッド』^{UNDEAD}はブラム・ストーカー作の小説『ドラキュラ』で初めて使われた表現である。

いふなれば語句として、アンデッドの始まりは吸血鬼なのだ。

アンデッドは皆、食事不要で眠らない存在——という訳ではない。

サトルのようなスケルトン種はむしろ珍しい方だ。

例えば屍喰鬼ことグルルは名前の示すように屍を喰らい、ミイラ男ことマミーは棺桶で眠る。

そして吸血鬼。

死体を食すグールとは違い、彼らは生き血をすするアンデッドだ。

シャルティア・ブラッドフォールンのような種族としての吸血鬼とは異なり、クラス職業である吸血『姫』もまた。

飲食不要のアイテムがなぜ効かなかったのか？

それは異世界の吸血鬼にとって、吸血行為には二つの意味があるからだ。

一つは哀れな犠牲者を蹂躪する吸血——これならばアイテムは効いていた。

もう一つは吸血鬼ヴァンパイア・ブライドの花嫁などの同族や、眷族に招き入れるほど執着アイした人間を対象とする求愛。

後者が求めているのは食事としての血ではない。

味わうのは生前から失った温もりと、不死者の渴きを癒やす為の『愛』だ。

性的な快楽さえもたらす『愛』の吸血は、人間における性交——体液の交わりという意味で等しい。

事実、人間の血と精液は成分としては近しいと言われている。

愛している相手の温血液もりを求めるのは、吸血鬼としてごく自然のこと。

ゆえにステータスの異常ではない。

愛に飲食不要の効果は及ばない。

少女は文字どおり吸血鬼として成長したのだ。

サトルと出会い、たび経験を重ね、彼を愛することによつて。

※ ※ ※

最近サトルは非常に気まずい。

夜な夜なキーノの部屋から、押し殺した吐息と声、ベッドの上で身じろぐ振動が伝わってくるからだ。

出会った時から誕生日を迎えてキーノは13才。

人間でいえば思春期まっただ中、性の目覚めがあつてもおかしくはない。

微妙に距離を取られ、接触を避けられていたり、時おり顔色が興奮したように赤いのも納得だ。

見て見ぬふりをしてやるのが、大人としての対応というか武士の情けだろう。

(女の子の方が男よりも先に大人びるって言うからなあ……)

肉体の成長は止まっているキーノだが、最近は不思議と色気というか艶めいた雰囲気がある。

視線を感じて振り返ると、熱っぽく潤んだ表情をしていてドキリとすることも増えた。

いけないと思うが、夜な夜なの気配は少女が乱れている状況を否応にも想像させる。
(俺はペロロンチーノさんじゃないんだ。エロゲみたいな展開は望まない……！)

手を取られ、幼い胸を押し当てられた事もあったのだ。

キーノが自分に向ける好意は、最早はつきりとしている。

それでも間違いを犯さないよう注意しなければ。

でも、『間違い』って何だ？

人の世の道OVERROADを踏み外すことか？

人間ならば相手が幼い時、その成長を待つて誠実に付き合うこともできる。

しかし、キーノはアンデッドとして時も死も止まった状態だ。

そもそも自分は少女の想いにどう応えるのか？

嫌いではない。

それはハッキリと言える。

彼女との旅は、ユツドラシル仮想空間で過ごした黄金時代の喪失以来、楽しいと思える時間だ。

異形種というくくりでも、アインズ・ウール・ゴウン時代の続きに等しい。

嫌いなはずがない。

また失いたくない。

それだけはキツパリと断言できる。

※ ※ ※

キノ・ファスリス・インベルンは誕生した時から吸血鬼ではない。人間が転化した存在だ。

少女らしい幼さを精神に残した、大人を凌駕する異形種の身体。

太陽の笑顔を見せる、夜と退廃の似合わない吸血鬼。

収まっていた二律背反は均衡を崩していた。

欲求は我慢すればする程、高まるもの。

単純に渴きを満たすだけでなく、性的な快感さえもたらす吸血鬼の求愛は凄まじい。

しかも彼女が転化したのは大人ならぬ13歳。

ただでさえ育ち盛りで、思春期が始まるうとしていた年齢には、吸血鬼の衝動は地獄の責苦に等しかった。

吸いたい / 吸いたい / 吸いたい / 吸ったら嫌われる / 吸いたい

衰退 / 衰退 / 衰退 / 衰退 / 吸い……好いた

い……

求愛の衝動に耐えていた原動力は、皮肉にもサトルに迷惑を掛けたくない・嫌われたくないという思い。

キーノは精神を削るようによく耐えていた。

ある意味、愛の証明だった。

しかし――

※ ※ ※

人里のない荒野や森林を突き進み数週間。

今日も魔法のコテージを展開して夜露をしのぐ。

キーノが距離を置くようになった、サトルの寂しい夜の時間に終わりが来た。

背中に、ぼすんと寄りかかる小さな重み。

久しぶりの感触が予想以上に嬉しくて困る。

甘えてくる少女に指摘をすると、へそを曲げ見栄を張って離れるかもしれない。

そう思つて何気ない風を装い、振り返らずに黙つて任せるままにした。

だから、キーノの異常に気づくのが遅れた。

虚ろな赤い瞳は光を放ち、闇の中で燃える炎のよう。

小さく可愛い八重歯は、鋭く伸びて犬歯に。

白く小さな手がサトルの胸元に伸びる。

サトルは失念していた自分を怒鳴りつけた気持ちだった。

異形種のデメリット。

醜い外見や一部の能力に対する制限といった不利な特徴。

血を欲しない吸血鬼を、吸血鬼と呼ぶ訳がない。

加えて危機感が抜け落ちていたのだ。

自分は強力な装備や各種スキル、少女とのレベル差もあり、血肉を持たない肉体だから被害は及ばないと。

糞っ！ 違うだろう、鈴木悟！

こんな時、傷つくのは俺じゃない！ キーノの方だろうがっ！

「——サトル……きらいに……ならない……で……」

胸にすがる腕は抵抗と恐怖で震えている。

苦しげな懇願を耳が拾い、サトルの腹は決まった。

迎えるように腕を差し出して、相手を胸元に抱き寄せる。

血肉はないが、キーンが落ち着くなら持つていけ！

白骨に牙の刺さる小さな痛みは一瞬。

訪れた快楽に精神抑制が反応し、サトルは微かに発光した。

エナジードレイン。

精や魂を吸い上げることで、対象の能力やレベルを低下させる凶悪な特殊能力である。

悪魔種族のサキユバスも同スキルを持つが、彼女たちは不死者からは奪取が難しい。

不死者が宿す負の生命力が害になるからだ。

だが、同じ不死者である吸血鬼やワイト等はこの問題をクリアする。

失ったレベルは再び経験値を積むか、信仰系魔法の高位呪文<復活リスタア>を使用すること

で回復できる。

もつとも、後者で回復できるのは1レベルのみ。

強力な3レベルや5レベルのドレインを喰らった場合、一部しか回復することができない。

ユグドラシルでは未発見で終わった隠し職業クラスを取得すれば、レベルドレインを覚えるはずであった。

死亡のペナルティでなく、レベルを下げるができる。

これはフレンドリィ・ファイヤーが有効な異世界では、再レベルアップでスキルの再構成を行えるという事だ。

攻撃の手段としてのみならず、仲間をより強くする調整にも役立つ。

キノノの『吸血姫』は職業スキル。

職業とは生き方。

何が変化・成長の兆しになるか分からない。

例えば浮浪児が姫の護衛剣士になったり、平凡な村娘が將軍になる場合もあるだろう。

そして職業のレベルが上がれば、新たなスキルを覚えることもある。

愛を知ったことで進んだ『吸血姫』としての成長は、秘められたドレイン能力を開放させたのだ。

気がつけばサトルの腕の中にいた。

罪悪感を伴った満足感。

視界が熱く揺れる。

「泣くほどお腹すいていたのか？」

空腹じゃなくて渴きなんだけど。

声を出すと嗚咽になりそうなので、キーノは首を振って否定する。

レベル差があり過ぎてキーノの身体や能力では、サトルの防御抵抗を突破できる訳がない。

だから、これは故意に装備や常時^{パッシブ}スキルなどの守りを解いた結果。

彼の甘い、本当に甘い優しさだ。

「あ……ああ……っ……」

怖ろしかったのは、サトルから奪った精を『美味しかった』と感じたことだ。

大事な人を食物のような対象にしたこと。

これがシャルティア・ブラッドフォールンのような、生来の吸血鬼であつたら悩まなかつたに違いない。

食べちやいたいくらい愛しいひと。

吸血行為は吸血 ” 好意 ” 。

魅力ある存在の血潮（いのち）を己の中に取り入れたい。

人間の女が好いた相手の子種を欲しがるように。

人間の心を持つ『吸血姫』には理解できない。

彼女は吸血鬼としても年月が浅いゆえに。

初恋の愛を抱く『吸血姫』には許容できない。

奪うことも愛の形の一つと知らないゆえに。

とうとう耐え切れずに、キーノの瞳から涙が零れ落ちた。

初めて吸血鬼としての自分を怖れて。

この愛は成就しない初恋であると悟って。

少女は決心した。

サトルと自分の旅は終わりが近づいている。

だったら、大好きな人の幸せを願おう——

『吸血姫』の想いは王子に愛される白雪姫ヒューマンでなく、相手の幸福を願う人魚姫モンスターのそれ。

ゆえに肉声ほんねを失い、地上を歩く度に初々しい足が痛みを伴う。

翌日からキーノがサトルと一緒に過ごす時間が復活した。

代わりに少女の笑顔は変化している。

冬の陽のようにどこか遠くて、そっとこぼれる表情として。

透き通った笑顔は不死者には似つかわしくなく、まるで死期を悟った病人のようであつた。

※ ※ ※

「ねえ、サトルのお友達のお話を聞かせて」

笑うことが少なくなったキーノが嬉しそうにするから、ほぼ毎日サトルは語った。かつての仲間達の想い出。

人生で最も楽しく、時間とお金と情熱を費やした日々。

語る内に声に熱がこもり、瞳の輝きはあの時間に戻る。

サトルはこの時、気づかなかつた。

キーノが嬉しそうなのは、好きな人が心から嬉しそうに見えるからだ。

(……決めた。名前はやっぱり——)

「そういえば、最近キーノは何をしているんだ？」

「何のこと？」

サトルが離れた時を見計らって、少女が何かしている感じがあつた。

教えないなら、もう仲間との日々は話さない。

そう問い詰めるとキーノは渋々と口を開いた。

「……新しい魔法を創っているの」

少女の趣味は魔法開発と実験だ。

以前その産物である香水をサトルは貰ったことがある。

地属性エレメンタリストらしく、また水晶に関係した内容だろうか？

「どんな魔法なんだ？」

「ないしょ、だよ」

今度は脅したり懇願しても、決して教えてくれなかった。

「完成したら絶対サトルに見せるから」の一点張り。

「そんなの気になつて仕方ないじゃないか！ じゃあ、1つだけでもヒントを！」

「ダメ」

「ヒントをくれないと悪戯しちゃうぞ？」

「私サトルになら何されても良いもん」

「ちよっ!？」

キーノがささやかな胸を突き出す。

悪戯つてそっちじゃねえよ！ と叫びたいが、いつぞやの触った時を思い出してサトルは怯んでしまった。

ただでさえ秘密が不満なのに、こうやり込められてばかりでは面白くない。

意外と負けず嫌いの彼が、つい口にしたのは――

「ヒントくれたら一回だけ吸つても良いから」

「……っ！」

一瞬で少女の顔が蒼ざめて、サトルは己の失言を悔やんだ。

キーノのエナジードレイン。

先日は幸いにも、サトルの能力値やレベルを下げることは無かった。

高位魔法詠唱者がレベル99から100になる経験値と、未完成の中位魔法詠唱者がレベルを1つ上げる経験値では、余りにも桁が違う。

おそらくはレベル差があり過ぎて、未熟なキーノでは吸い切れなかったのだろう。

それでもキーノの渴きを数日も抑えるだけの莫大な精気エナジーは奪われているのだが。

「……ごめん、悪かった。もう聞かないから許してくれ」

「いいよ。さつき言ったでしょう？ 私サトルになら何されても良いって」

弱々しく首を振りながら、キーノが額をサトルの胸元に押し当てる。

伏せた表情は彼からは見えない。

少女の口からヒントが一つ。

「絶対サトルに破れない魔法」

これは大きく出られた。

サトルも魔法詠唱者として、それなりの自信はある方だ。

自身が招いた暗い雰囲気吹き飛ばすように、意識的におどけてサトルが笑う。

「何だよ、まるで超位魔法やワールドアイテムみたいだな」

「ワールドアイテム？」

世界に匹敵する効力を持つ、規格外の魔法の品々。

現在サトルも装備しているが、流石にそれは伏せておく。
軽く説明するとキーノは何気なく呟いた。

「でもね、私にとってサトルが世界みたいなものだよ」

至近距離で告げられて、愛おしさがサトルの胸にこみ上げてくる。

爆発的な感情でなく、器が満たされるような静かな温もりだった為、精神抑制は発動しない。

自然と手をキーノの頬に伸ばす。

小さな唇と歯並び口が触れた。

事故によるものではない。

頬や額にする親愛の印でもない。

これはサトルが初めて明確に示した意志だ。

泣き虫の少女が頬を濡らす。

サトルは嬉し涙だと疑わなかった。

泣き虫の少女が喉を鳴らす。

己の罪深い衝動に耐えながら。

望外の幸せは彼女の絶望を加速させる。

それでも自分はサトルになら何をされても良い。

キーノが受け入れることで『吸血姫』としての成長が進み、職業クラスの限界レベルを目指し始める。

そして——少女の魔法が完成する日がやってきた。

— 中編に続く

【# 最終話 オーバーロード 中編】

旅の進行は緩やかなものになった。

森林を抜けて、人里から遠く離れた山脈の麓に差し掛かっている。

冷たい夜風が吹き荒ぶ中、魔法のコテージで二つの影が寄り添う。

元より冷気に耐性ある身だが、心は温かい。

「ねえ、今日もお話を聞かせて」

キーノにせがまれて日課となった、サトルのアインズ・ウール・ゴウン時代の想い出。黄金時代のエピソードも終わり、今ではナインズ・オウン・ゴール時代に突入している。

「——こうして、俺はたっちさんに助けられたんだ」

始まりは独り。

身に降りかかる理不尽の中、手を差し伸べられて仲間になり、情熱を捧げる程の大事な時間を得られた。

ああ、その想いに共感できる。

キーノにとってサトルとの旅は黄金の時間だったから。

胸が苦しくなる程に、隣にいてくれる存在が愛おしい。

途端に感情に反応して少女の喉が——いや、牙で舌を少し傷つけ、血を舐めとる事で抑える。

「もう話すような、目ぼしいネタは無いな」

「終わったの？」

「まあ、一応な」

「終わっちゃったんだ……」

サトルの言葉にキーノが目を閉じる。

終わりを胸中で噛み締めるように。

反芻するように無言の後、少女が何気なく口にした。

「……サトル。私ね、魔法をひとつ完成させたの」

「おっ？ 例の新魔法か？」

「うん。明日披露するね」

サラマンダー
火蜥蜴のローブの下で、少女の膝が緊張で震える。

サトルが教えてくれた、ぷにっと萌えさんの教え。

『勝負は始まる前に終わっている』

物事は師より教わる時よりも、覚えた自分が新たな弟子へ伝授する時こそ、より理解

度を深める。

実際サトルはキーノに伝授したことで、改めて戦術を復習した状態である。

アインズ・ウール・ゴウンが誇る特殊役^{ワイルド}だったサトル。

その幅広い対応力を以ってすれば、キーノの新魔法も阻止されるかもしれない。

だから、想い出話を聞いた時、願を掛けて名前が決まった。

『絶対サトルに破れない魔法』。

それを目指した結果の一つでもある。

キーノが編み出したオリジナルの新魔法は、名を『ナザリック』と名づけられていた。

その効力は——……

※ ※ ※

緑の少ない、剥き出しの岩場で占められた山岳地帯。

魔法のお披露目には格好の場所だ。

人里から離れたこの場所なら、被害は生じず人目も気にしなくて済む。

二人の魔法詠唱者は適度な距離を置いて向き合った。

サトルの魔法耐性は術者のレベルに関係なく、低位および中位の魔法を完全に無効化

する。

中位レベルの魔法詠唱者であるキーノの魔法も、効果を受ける正面から観察が可能だ。

だからこそ、少女の理想的な状況が整った。

「まず最初に——」

前置きを口にして、吸血姫が深々と頭を下げる。

「私と一緒に居てくれて、本当にありがとう……サトル」

「急に何だよ？」

「今までの旅の全て。私、忘れないから」

「……………」

顔を上げた少女の表情に、サトルが言葉を詰まらせる。

いつもの彼女なら、緩んだ照れや赤面が浮かんでいただろう。

しかし、そこにあったのは白く固い——まるで覚悟を決めた冷たさ。

何故だか胸騒ぎを覚えて、サトルは無意識に身構える。

「私達の旅は終わり。ここでお別れだよ。サトルは——」

「おい、待った。どういう……」

「私をここで置いて行って良いから」

「なっ!？」

即座に精神抑制が働き、サトルの驚愕と混乱を鎮める。

それ程に激しい感情が生まれた証だ。

「お別れって、俺キーンが嫌がること何かしたか？」

無言でキーンは首を左右に振る。

「じゃあ、俺のこと嫌いになったのか？」

「だ——」

大好き……と言いかけて、胸がぎゅつと苦しくなつて口を結ぶ。

ゆっくりと牙が伸びる感触。

喉が渴いてサトルに手を伸ばしたい。

ああ、駄目だ。

息苦しく求めるほど愛おしい。

あと数分の辛抱で全て済むのに、衝動に飲み込まれそう。

そんな無様な決別を、サトルに残して良いはずがない。

最後のお別れだから、精一杯の笑顔を浮かべる。

魔法で生み出した水晶の鏡の前で、何度も何度も練習をした成果を。

練習では上手く出来たのに。

未練は整理したはずなのに。

「ばいばい、サトル。幸せになってね」

涙がこぼれそうになり、慌てて少女は言葉を継いだ。

「おっぱいの大きい人と」

完全な蛇足。

自分の間の悪さに笑ってしまふ。

だから何とか、最期までサトルに向けて笑顔は維持できた。

※ ※ ※

笑顔を浮かべるキーノに対し、サトルは冷たい汗を浮かべる思いでいた。

自分は少女の嫌がることをしていない。

少女は自分を嫌いになってもいい。

キーノ本人が否定したから間違いはない。

なのに『旅が終わる』。

ここで『お別れ』。

何故このタイミングなのか？

それは——新魔法のお披露目だからだ。

「ばいばい、サトル。幸せになってね」

少女の言葉に、直感は確信に変わった。

相手を好きなのに別れる。

単に別れるだけなら、転移魔法でも良いだろう。

間違いなく、キーノの新魔法は危険な類のものだ。

＜^{タイムストップ}時間停止＞

間髪入れず、サトルが発動したのは、魔法無詠唱化サイレントマジックによる即効時間停止の魔法。

時間停止の最中は相手にダメージや効果が生じない為、魔法も意味は成さない。

ゆえに解除のタイミングに合わせて、ディレイマジック魔法遅延を併用させた対魔法の防御術を自

身にかける。

『絶対サトルに破れない魔法』

以前キーノが洩らしたヒントが本当なら、こちらの守りを突破する何かがあるはずだ。

サトルは微塵も気を緩めるつもりはない。

新魔法は効果が発動するまで、初見殺しに等しいからだ。
警戒を解かない中、停まっていた時間が動き始める。

「おっぱいの大きい人と」

その言葉が耳に入った瞬間、サトルは課金アイテムを発動させて再び時間を停めた。
正直少しムカついたので。

確かに胸が大きい方が好みではある。

だが、恋愛は感情であり、理屈や利益と反することは珍しくもない。

芽生えた感情はどうにもならないし、勝手にこちらの『好き』を見くびられたように腹立たしい。

サトルは決めた。

キーノが泣いて謝っても、赤面して悶えることを決行しよう。

徹底的に嬉しからせて、どれだけ自分が愛されているか思い知らせてやる。

その為にも彼女の新魔法を封じる。

二度目の〈時間停止〉の最中、〈魔法遅延〉と共に、少女に対して〈究極の妨害

〉を仕掛けた。

これはフレンドリイフアイヤが有効な異世界だからこそ可能なハメ技だ。

第十位階魔法〈究極の妨害〉は味方一人の魔法耐性を急上昇させる代わりに、魔

法の行使能力を壊滅させる。

つまり、魔法職を封じる奥の手である。

「悪いが、キーノの魔法は封じさせてもらった。何を企んでいるのか知らないが、新魔法は次の機会に——」

「サトルの欠点は自分の評価の低さだね」

その勝利宣言を少女が遮った。

「私はサトルが相手だから、最大に注意して最高に戦術を練った。でも、どうしてもサトルを上回る方法が見つからなかった。

考えに詰まった私が見つかったのはサトルが教えてくれた、ぶにと萌えさん考案の戦術だよ」

「まさか、キーノお前——」

「うん、サトル。私の新魔法はね、発動も進行も極端に遅いという、致命的な欠陥があるの」

魔法は早く発動した方が良い。

そのセオリーとは正反対に、超位魔法も余裕で超える儀式魔法めいた発動時間。

実用性を度外視して、威力のみを追求した新魔法。

「魔法はその性質と効果を知り、使い方次第で巧くハマる。」

遅いのなら、＜魔法遅延＞みたいなタイミングを合わせれば良いもの」
『戦闘は始まる前に終わっている』

計画と準備の大切さを説く、ぶにっつと萌え直伝の戦術に倣い、キーノはサトルと対峙した時点で魔法を唱え終わっていた。

アインズ・ウール・ゴウンが誇る特殊役ツイルドであったサトルを以つてしても、対応は難しかっただろう。

炎や雷なら視認できる。

回復や瞬間移動であれば察知できる。

速度上昇や筋力強化なら対抗魔法で相殺する。

召喚や防壁であれば発動の前後に合わせて潰せる。

だが、不可視の『呪い』の進行は目には見えない。苦痛や傷を生じるものでないのなら尚更だ。

サトルは死霊系魔法詠唱者。

解呪を得意とする信仰系魔法とは対極の位置に近く、得手・不得手で言えば前者とは言い難い。

こうして距離も速度も対策されて、レベル差も魔法防御も関係なかった。

新魔法は対象がキーノ自身であり、しかも発動ポイントが術者の『体内』であったか

り三度目の停止が間に合わない。

ハメ技であつたく究極アルティメット・デイスターの妨害＞が邪魔する形で、彼女をサトルの魔法から護るからだ。

その解除も含めて、有効となる手段を放つには一手が足りない。

残り一秒は――

サトルは魔法を発動しながら、相手を見ていた。

キーノは何もしないまま、サトルを見つめていた。

愛しい人の姿を焼き付けて目蓋を閉じる。

これで良かったのだ。

本能に狂つて取り返しのつかない悲劇を招くよりも、きちんとお別れを告げる方が。

サトルはもの凄く怒るだろう。

だから、罰として自分のことは捨てて、他の誰かと幸せになつて欲しい。

私の世界サトルは終わったのだから。

暗闇は直ぐにやつて来て、キーノの意識すべてを飲み込んだ。

無詠唱によるグレート・テレポーション上グレート・テレポーション位グレート・テレポーション転移＞で距離を詰めたサトルの腕の中で、ゆつくりと少

女は倒れ込んだ。

※ ※ ※

サトルの把握していたキーノの最大魔法は、第五位階のはずだった。

しかし、彼女は吸血姫として覚醒している。

サトルは異世界では規格外の存在だ。

そんな彼からエナジードレインで奪った経験値により、位階は英雄を超えた人外の域たる第六へ。

これをく魔法上昇オーバーマジックで、本来は使用できない二つ上の位階を発動。

17レベルの蜥蜴人リザードマンの祭司シャーマン。彼女が本来は使えない第五位階の全体治療魔法を発動

させたアレである。

そう、『精神墳墓（ナザリック）』は第八位階の魔法であり、さらにく魔法位階上昇ブリステッドマジックで、新魔法の威力を第十位相当まで強化させた。

サトルなら第一位階の魔法を第十位階まで強化できるが、キーノはせいぜい二位階の強化が限界だ。

強化の二つ重ねで、魔力の消費は限界。

新魔法『精神墳墓（ナザリック）』は一度の発動でキーノのMP全てが空になる、文字どおり一発勝負。

固い魔法耐性と複雑な構成で解呪が極めて難しい永遠の眠り。

それは愛しい相手が話してくれた、彼の大切な思い出が詰まった地下大墳墓と同じ名前である。

「……何だよ、これ……」

倒れ伏した少女の懐から、サトル宛ての手紙が発見された。

『吸血姫』による吸血の衝動が始まったこと。

サトルをエナジードレインして以来の苦悩。

キーノの身に起きていた事態と、今回に至るまでの流れが書かれていた。

何故こうも説明をしたためたのか、この一文で理解する。

『サトルは何も悪くない』

少女は相手が苦悩しないよう、馬鹿正直に説明を書き遺したのだ。

ただ王子の幸福を願った、マリーメイド・プリンセス声帯を失った姫のように。

「こんなことをされて、俺がハイさよなら、と見捨てると思ってるのか？」

サトルに奥の手はある。

超々希少アイテム、シユールティングスター流れ星の指輪。

レベル95の魔法詠唱者でなければ習得できない超位魔法<星ウイッシュユ・アボン・ア・スターに願いを>を、

経験値の消費無しに三度まで行使できる最高の課金アイテムである。

それも本来なら、ランダムで選ばれる願いの選択肢（一つにつき経験値が10%消費）が最大数の10個で発動。

二百を超える選択肢も有用なものが選ばれ易く、超位魔法のネックである発動時間ゼロ口という、本来の超位魔法の上位版ともいべき効果である。

これが地下大墳墓ナザリックの宝物殿を使用できる状態であつたら、サトルもためらわず使用していただろう。

所有ワールドアイテムの中には、願いを叶える類のものもある。

優れた魔法詠唱者が直に発動する魔法の効果には劣るが、信仰系や精神系魔法の回復・解呪を秘めたアイテムもある。

だが、現状は宝物殿はなく、所有アイテムは限られている。

それだけではない。

アインズ・ウール・ゴウンの仲間達を探す為に流れ星の指輪を使っていない理由と同じだ。

指輪を使って願いが叶わなかった場合、絶望が決定してしまう。

それ以前にランダムで選ばれる以上、三回とも無駄打ちで終わる可能性もある。

サトルは知らない。

異世界では指輪の効果が全く違うものに大変異していることを。

最大500%の経験値の消費——5レベルダウンで、望む願いを確実に叶える奇跡を起こす効果を。

指輪は手を打ち尽くした、最後の最後にとっておくべきだ。

サトルは思案する。

そもそも、指輪で願いを叶えて魔法の眠りを解除したところで、事態は解決しない。

キーノのサトルに対する吸血衝動は残ったまま。

二つ目の願いで消すか？

駄目だ。

衝動が『吸血姫』固有の求愛であるのなら——その吸愛を消すことをキーノは拒否するに違いない。

根底にあるのは自分に対する愛情。

愛を失うことで、一緒に居られるようにするとは本末転倒も甚だしい。

実のところ、サトルが指輪を使用しないのは正解であった。

蘇生魔法と同じく、呪いもまた本人が望まない意思を持つ場合は解呪が成功しない特殊例がある。

死が耐え難い苦痛の慈悲となるように、呪いと祝福は表裏一体だからだ。

ましてや今回、キーノは望んで自ら魔法を発動している。

万能に思える願いの指輪にも穴はあるのだ。

ユグドラシルのプレイヤー達に絶大なる信頼を得ている糞運営。

彼らの方針『新たな発見の為に』則つて、超位魔法を超える世界級アイテムにも発見すべき抜け道を作っている。

だからこそ、『傾城傾国』の精神支配を解除する手段——死亡からの蘇生があり、世界級アイテムの効果を防ぐ方法——世界級アイテムの装備という解決策があるのだから。

昏倒したキーノを魔法のコテージに運び、ベッドに寝かせてサトルは付き添った。

事態を飲み込んでも、アンデッドが感じないはずの疲労感で身体が重い。

「キーノ起きろよ。起きないと俺、八つ当たりで近隣諸国を滅ぼすぞ?」

少女は応えない。

ただの屍のようだ。

「スレイン法国なんて三日も持たないからな。早く起きないと世界征服どころか、世界滅亡しているかもだぞ?」

少女は応えない。

ただの屍のようだ。

「なあ頼むよ、キーン。世界なんて要らないから、起きて声を聞かせてくれよ」
少女は応えない。

くすぐろうが頬を引っ張ろうが、独り空しくサトルの声が部屋に響くだけ。

「糞があつっ!!!」

精神抑制が激情を鎮めたが、サトルの悲しみは晴れない。

涙の雨は流れないが、暗い気持ち曇り空のように心を覆っている。

「楽しかったんだ……」

ギルドの仲間達の引退の時は、友人達を見送る側として、成すすべなく運営のサービ
ス最終日を迎えた。

ゆっくりと衰退していった栄光の日々。

あの時とは違い、キーンとの旅は唐突に終わった。

少女の苦悩に気づかず、自分だけ浮かれて楽しんでいたのだ。

いや——

旅は終わってなどいない。

少女の問題も今は把握した。

ならば、己のやるべきことなど一つだ。

『でもね、私にとってサトルが世界みたいなものだよ』

『絶対サトルに破れない魔法』

キーノの言葉を思い返す。

つまり――

「絶対、世界級サトルに破れない魔法とは、大きく出たなキーノ。ならば本当かどうか、答え合わせといこうじゃないか？」

ひとりの人間が世界を変えることがある。

ある者は自由を勝ち取った奴隷。

ある者は前人未到の記録を生んだスポーツマン。

分野に革命を起こした技術者や、怖ろしい病魔を駆逐した医者もいた。

人間ですら世界を変えるのだ。

ならば、ひとりの超オーバーロード越者は世界を――……

※ ※ ※

【? 日後】

各諸国に吉報が届いていた。

邪法を操る秘密結社ズーラーノーンが壊滅したと。

かの組織が保有していた研究と儀式——“死の螺旋”を含めた資料が全て奪われたが、その事は知られなかった。

【?年後】

特務部隊・風花聖典により、スレイン法国へ吉報が届いていた。

異形による人間の被害が減っていたのだ。

特に吸血鬼に襲われたケースが。

まるで吸血鬼を狩り尽くしたように、吸血鬼の目撃例すら途絶えた。

なぜ消えたのかは全く分かっていない。

解呪の実験体にされているという報告もあつたが、現実味の無さに笑い話と消えた。

【?年後】

竜王国に吉報が届いた。

侵攻を繰り返すビーストマン国家の恐怖から解放されたと。

始めは誤報だと疑われた。

三日間でビーストマンは国そのものが、地上から消えたと伝令が伝えた為に。

後に三時間の間違いであつたと訂正。

一掃したのはモモンガという魔法詠唱者。

しかし、竜王国にはウォーモンガーWarmonger（戦争狂）と伝聞された。

この間違いは訂正されていない。

単純な名前の聞き違い。

そして一方的な殺戮は戦争と呼べる代物ではないという、二重の誤りは。

〔?年後〕

滅ぼされたビーストマン国の広大な跡地に、新たな持ち主が誕生していた。

住人は件の魔法詠唱者。

彼に救われた形の竜王国としては、むしろ祝いを送る立場を取っている。

さて、異世界を旅する者は地図で見たことがあるだろうか？

竜王国の東は険しい山岳地帯。

西には広大な湖があり、その遙か先の対岸にスレイン法国。

北にはアンデッドが多発するカツツエ平野。

残る南に旧ビーストマン領があった。

つまり、竜王国という土地は左右を山と湖で塞がれて、カツツエ平野と旧ビーストマ

ン領に、上下を挟まれた状態である。

もしもアンデッドを続けるような、カツツエ平野を支配する存在がいれば、挟撃の憂き目に遭うだろう。

平野を常に覆う霧から軍勢が侵攻する日まで、誰も気づかない可能性の話である。

【??年後】

国家を次々と陥落・吸収する謎の“国墮とし”。

あるいはアンデッドの軍勢を取り巻く中心の存在を指して、“死の螺旋”と呼ばれた。

異なる可能性の分岐で、イビルアイと名乗る少女が背負うものを奪って。

大陸の半分を掌中にした“国墮とし”は、未だ望むものを手に入れられずにいた。

【??年後】

蠅の悪魔がいた。

樹の魔竜がいた。

各地に出現し災厄をもたらさんとした魔神たちは、ことごとく鬼神の働きをする魔法詠唱者に滅ぼされた。

世界の為ではない。

一人の少女の眠る屋敷が、魔神たちの進む先にあつたことが原因だった。

※ ※ ※

夢は数少ない、自己の無意識と向き合う手段でもある。

『吸血姫』という職業クラスの限界レベルに到達。

さらに――

愛を知った。

指輪を得た。

身を捧げた。

かくして三つを満たした『姫』は――……

それが何だと言うのだろうか？

愛する相手と一緒にされるのなら、喜んで『それ』を選んだかもしれない。

でも無意味だ。

彼さえいれば何も要らなかつた。

彼と居られないなら何も要らない。

月のない夜闇のような真つ暗な意識の世界で、少女は何かに応えた。

もうどうにでもなれ、好きにしていよいよ。

接触した自己と他者がそれぞれ。

無意識は『了承』と受諾し、彼女を変え始める。

外意志は『了承』と受諾し、彼女と契約を結ぶ。

かくして二つと結んだ『吸血姫』は……

※ ※ ※

「……お目覚めですか？」

ぼんやりとした意識に、知らない声が届く。

目蓋を開けば、浅黒い日に焼けた肌をした背の高い男がいた。

見たことがない手足にびったりとした赤い奇妙な服。

ズボンからは鋭いトゲを持つ尻尾が——し、尻尾っ!?

意識を完全に覚醒して、少女は慌てて身体を起こした。

豪奢で広い部屋にある寝台の上、身震いしながら構える。

種族の識別に成功。

目の前の男は、途方もない力を持った大悪魔だ。

悪魔？

ああ、そうか。

自分はサトルに酷い事をしたのだ。

地獄で裁かれるのも仕方ないだろう。

思い出した最後の記憶に、少女はうな垂れて構えた腕を下げた。

「どうやら混乱しているようですね。初めまして。私はデミウルゴスと申します。41人の至高の御方を創造主とする——」

41人。

聞き覚えのある数に、少女はハッと顔を上げる。

「サトルに聞いたことがある！」

「おおつ、モモンガ様の真名ですか。サトル様のサトルとは『悟りを開いた』意味で、神に為った存在——ええ、実に相応しき御名。」

それを軽々しく呼び捨てにされるのは如何なものかと？」

口調は丁寧だが、男は怒っている様子である。

「ごめんなさいと頭を下げつつ「モモンガ様？」と尋ねると、男はサトル様の魔法詠唱者の名前だと教えてくれた。」

サトルが王様や貴族みたい、すごい権力の持ち主だと理解する。

つまり、サトル・スズキ・モモンガということだろうか？

サトルに逢いたい。

でも、あんな仕打ちをしておいて、合わせる顔がある訳がない。

幸いサトルの事を考えても喉の渇きは今は感じないし、今の内に早くここを立ち去らないと。

その為にも情報収集は基本。

相手から話を聞き出すべく、少女は男の好みそうな前振りを考える。

忠臣タイプならその主人——サトルの話題は気まずいから、男の創造主を誉める話から入るべきだろう。

「サトル……様から聞いたことがあるけど、デミウルゴスさんって、ウルベルトさ……様が創造主なんだよね？」

自分よりも凄い魔法詠唱者だったって、サトル……様が言ってた！

慣れない様づけに詰まりながら話題を振ると、予想とは違った反応があった。

「何故……貴女が……？」

驚愕？ この人あまりウルベルトさんのこと知らないのかな？

「我が創造主のこと、どこまでご存じなのですか？」

「アインズ・ウール・ゴウンを結成する前の、九人の頃に——」

!!!?

男の激しい動揺を目の当たりにし、驚いた少女は寝台の上で後ずさった。
何だか様子がおかしい。

「そ、その話を詳しく!」と歓喜したかと思ったら、急に考え込んで「……成る程、そういうことですか」と独り呟く。

そして、じつと少女を吟味するように見詰めた。

と——

「ウルベルト様のお話、残念ですがまたの機会に是非。たった今<伝言>^{メッセージ}を承りました。モモンガ様にご到着のようです」

「……サトルが来るの?」

「ええ、そうです。貴女が暗い顔をするのも分かります。湯浴みや着替えも出来ず、寝起きの顔をお見せするのは、女性として恥でしょうから」

違う、そうじゃない。

寝起きの顔よりも恥ずかしい場面、今までサトルに何度も見ら——そう胸の中で反論しかけて、サトルの名前に様づけしなかった事に気づく。

どうしてデミウルゴスさんは、注意しなかったのだろう?

「言っておきますが、<転移魔法>は無駄ですよ? この部屋に不届き者が来ないよう、

転移阻害の対策が施されていますから」

その忠告で合点がいった。

だから、サトルの到着も転移ではないのか。

「今さらだけど、デミウルゴスさん。ここは何処なの？」

主人を迎えるべく部屋を出ようとしていた大悪魔は、少女の問いに扉の前で振り返った。

「ここはかつてスレイン法国と呼ばれていた場所。

貴女の解呪の手段を求めて、モモンガ様が信仰系魔法詠唱者を確保しようと陥とした国。」

現在は私がモモンガ様の代行として治める、ナザリック統一王国の領土のひとつです」

— 後編に続く

【# 最終話 オーバーロード 後編】

扉を出たデミウルゴスは、同格の友人に気づき微笑んだ。

ライトブルーの蟲の姿をした武人。

リザードマン

蜥蜴人の部族や水棲モンスターが集う大湿地と、それに隣接する霜フロスト・ドラゴンの竜の生息地、アゼリシア山脈を統治するコミュニティスである。

「モモンガ様の警護かい？ 君も大陸の統治者の一人なんだから、部下に任せて王の仕事をしたらどうだい？」

「才前ニ言ワレタクナイゾ、デミウルゴス」

扉の前でお互いに苦笑する。

偉大なる御方の命で領土を治めているが、出来ることならナザリック地下大墳墓の各階層に戻りたい。

「最後まで我々を見捨てなかつた慈悲深き御方とは存じていたが、たった一人の娘の為に、まさか異世界を陥落させるとは」

「ソレデ、例ノ娘ハ？」

「ああ、無事に目を覚ましたよ。それと彼女に関してだが、モモンガ様の深謀は流石と言

うより他にない」

おそらく少女はナザリックの一員となるだろう。

しかし、ナザリックの住人は外界の者を軽視する傾向にある。

その点を考慮して、モモンガ様は真名と『物語』を授けたのだと、デミウルゴスは少女との会話で察知した。

至高の御方たちの過ごされた栄光の物語を知る少女。

特にNPC達にとっては自分達が創造される以前の話など、創世神話にも等しい垂涎の情報だ。

ナザリックの住人にとって、彼女の持つ価値は計り知れず、一目置かれることは間違いない。

「地下大墳墓^{ナザリック}ノ新タナ住人カ……」

「神聖なる地下大墳墓が騒々しくなるのは、歓迎すべからざる事態だがね。しかし、君の懸念はそこじゃないだろう？ 新たな妃候補の誕生だね？」

二人とも最後の主人に後継者を望む立場にある。

特にコキュートスは守り役を夢想しては舞い上がるほどだ。

「私としてはモモンガ様の直系のお世継ぎであることが重要であって、母親は誰であろうと構わない。」

それに王妃候補が増えることは純粹に喜ばしい。

候補者が増えることで『彼女たち』も本気になり、より妃に相応しくならんと邁進するだろうから」

アウラを除く二人は、自分達の内どちらかが第一妃に選ばれると慢心している節がある。

それは至高の御方を陰日向から支え、比翼として尽くす姿勢に相応しいとは言えない。

「モモンガ様ノ喜ビハ我々ノ喜ビ。アノ御方ニハ、幸セニナツテ頂キタイ」

「同感ではあるが、その言い方だとモモンガ様が花嫁のようだよ？」

「ムツ、不敬ヲ発言デアツタカ」

「まあ、あの御方がお喜びになるのであれば、多少の事は私も目をつぶろうじゃないか」
例えば様をつけ忘れた不敬だとか。

胸の中で独白しながら、デミウルゴスは同僚と共に片膝を突き、臣下の礼を取った。彼らの主人の足音が耳に届いたのだ。

※ ※ ※

扉がノックされた瞬間、キーノは反対側を向いてシーツを被り横たわった。

後ろめたさ全開の反射的な寝たふりの姿勢で後悔する。

悪い事をしたと思っっているのなら、この出迎えはない。

いつそのこと、再び『精神墳墓（ナザリック）』を発動——無理、時間が圧倒的に足りない。

扉の開く音。

近づいてくる足音。

目を閉じて緊張で固まっている少女は、全身が耳になった。

頭に乗る優しい骨の手の感触。

あつ……と思った時は、閉じていた瞳が熱くなった。

身体が幸せを覚えている。

「——声を聞かせてくれないか？」

一気に少女の涙腺は決壊。

涙をこぼしながら、起きて相手の首にすがりつく。

嗚咽で唇が震えて、ゴメンナサイが途切れ途切れになる。

「泣き虫なのは変わらないな」

それは泣かす方が悪いのだ。

叱責と罵倒を浴びせられても仕方ないのに、こんなに優しく声を掛けられるなんて。「この日をずっと待っていたんだ、キーノ」

その口調は威厳のある支配者モモンガでなく、万感の思いを込めたサトルのもの。壊れ物を扱うように、そっと相手の背中を両腕で包む。

優しく抱きしめられて、少女は眠っていた年月の分だけ、赤い瞳から涙を流し続けた。

※ ※ ※

「二百年かかったんだ」

泣き止んだキーノに乞われ、サトルが説明をする。

「吸血姫の衝動を解決するべく、キーノの吸血鬼化を一から洗い直し、その儀式の解明に五十年。」

同時に眠っているキーノの身を置く、安全な場所が欲しかったからな。

色々と邪魔してくる法国を叩く為に対抗勢力を作り上げて、国を建ち上げて。

周辺国家を陥したり同盟を組んで、対法国の包囲網を完成させてが五十年。

そうそう、俺ってアーグランド評議国の議員に籍を置いた時期もあったんだぞ？

カツツエ平野を平定させたり、亜人と異形種の大連合も結成したり。

残りの百年は統治の安定化と、キーノの解呪と研究に費やしていたな……」
凄まじ過ぎて言葉が出ない。

寿命がなく、不眠不休で働ける不死者だから——という要素で片付く話ではない。

「解呪手段を探す為に世界を攻略したら、ナザリック統一王国が出来たところか。

ナザリック地下大墳墓が二百年後に転移してくると知っていたら、もう少し楽が出来たんだが……」

サトルが何を言っているのか解からない。

七人の守護者が各大国を治めているというけど、それって大陸全土だろうか？

「人間も亜人も異形種も関係ない。すべて同じ国の民だぞ」

夢のような途方もない話だ。

私まだ眠っていて、夢でも見ているのかな。

夢———そういえば、サトルは『精神墳墓（ナザリック）』を解いたようだけど、一体どうやって？

それにサトルを見て、話していても喉が乾かない。

吸血姫の吸愛は治まっているのだろうか？

「その解決にヒントとなったのは、二人の魔法詠唱者だ」

一人は優れた死霊使い、リグリット・ベルスー・カウラウ。

百五十年前に接触した若い彼女はサトルに言ったのだ。

吸血姫の眠りが呪いであるのなら、呪いを解くのでなく、より強い呪いを掛けて上書きすれば良いと。

「吸血姫が不死者ならば、あなたや私みたいな死霊系魔法詠唱者の得意分野でしょう？」
解呪ばかり考えていたサトルにとって、その発想が契機となった。

そして、いま一人は大魔法詠唱者フルーダ・パラダイン。

彼が<第六位階死者召喚>を改良して作った、アンデッドを支配するオリジナル魔法。

神官の領域である死者を縛る力を、魔法の力で再現したもの。

LV35の死の騎士を支配できない魔法であったが、それを知ったサトルが応用して

完成させた。

<不死者支配>

<第十位階死者召喚>をベースに、各種魔法で効果を上昇。

さらにサトルの種族としての特異能力で強化させてある死霊系魔法。

吸血鬼は自らが親となり、血を吸った犠牲者を子とするモンスターである。

その系譜は絶対的な主従。

敬愛すべき始祖を吸血対象とする吸血鬼はいない。

その状態を構築する為の魔法^{のろい}。

「魔法が完成した時、老婆になつていた死霊使いにはこう言われたよ。

『吸血鬼の王侯の支配を可能とするとは。お前様は、まさに超越者^{オーバーロード}じゃな』と」

「つまり、それって……」

「俺は謝らないからな。キーノ・ファスリス・インベルン。我が眷族^{かぞく}として命令する——」

従者となつた吸血『姫』と、地下大墳墓の『王』が視線を合わせる。

目を逸らすことは許さない、耳を塞ぐことも許さない。

これから口にするのは、そんな絶対尊守の——

「もう俺を独りにするなよ、頼むからさあ……！」

「っ……！」

絶対なる支配者の切なる願いを受けて。

サトルが泣けない分、再びキーノが涙を流す。

人魚姫が声帯を失わないのは新たな分岐。

眠り姫が目覚めるのはハッピーエンドな証。

白雪姫のように七人の山小人^{ドワーフ}はいないが、七人の戦闘メイド^{ブレイア}が^{デス}いる王国に招かれて――

吸血姫は新たな一步を歩み出す。

『キノの旅』は終わったのだ。

旅とは飛び出しても、最後に故郷や家に帰り着くものなのだから。

故郷が死都となり滅んだ少女と、異世界から故郷に帰れない男は、第二の故郷に帰還する。

その名をナザリックという。

――エピローグへ進んで下さい――

【# エピローグ】

深夜の部屋で、サトルとキーノが向かい合う。

時間の経過も忘れて戯れ合った結果、いささか少女は興奮していた。

サトルのリードも危うい。

当初は恐る恐る手を伸ばしていたキーノは、すっかり慣れた様子だ。むしろ、サトルの方に迷いが出てきている。

サトルが手を添えて、入口に自分のものの先を当てる。

今晩でこのスリットへどれだけ抜き刺しを行っただろうか？

外に出す度に散らばった周囲を片付け、再開するの繰り返し。

今度は早く終わらせるつもりはない。

できるだけ粘って、先にキーノを追い詰めるのだ。

「そつ、そこまでして、抜くなんてヒドイよっ！」

「でもまだ先っぼだけだぞ？」

「ダメー！ サトルちゃんとして！」

観念してサトルがグツと押し込む。

「固い先から根元まで、細く狭い隙間に収まった瞬間——
「ああっ!」

勢い良く中から吹き出し、キーノが声を上げる。

無然とするサトル。

その様子にニツコリと笑い、私の勝ちだねと少女は得意げに胸を反らした。
ルビクキューなど六大神がスレイン法国に遺した玩具。

その一つ、クロウヒイーゲ・キキイパーツ——正式名称『黒ひげ危機一髪』で対戦した結果である。

こんなオモチャで一喜一憂するなんて、キーノもまだまだ子供だな。

仕方ない、そろそろ本気を出すでしょうか。

「えー、まだやるの?」

「勝ち逃げはズルイぞ。やらないのなら、もうキーノの頭は撫で撫でしない。ハグも禁止だ」

「もう、しょうがないなー。でもサトル? <時間停止タイムストップ>は禁止だからね?」

「……………も、もちろんだとも」

その後サトルは、ビギナーズ・ラックという言葉を感じ。

グレートリック
 <上位幸運>とく超常直感>を使っておくべきだったという反省を得た。

※ ※ ※

キーノがナザリック地下大墳墓……もとい、ナザリック統一王国に受け入れられたかというと微妙なところだ。

至高の御方である主人モモンガ——サトルが保護した現地の吸血姫。

その関係を正確に把握できている者はいない。

至高の御方に仕える家臣として、最高位の實力を備える七人であっても。

かつては階層守護者と呼ばれ、現在は大陸を支配する六侯と、ナザリック地下大墳墓の筆頭執事——定期的な合同会議で顔を合わせた面々であっても。

「珍しい吸血鬼だから手に入れられた、モモンガ様のペットでしょう?」

瞳は決して笑わずに、双角双翼の女悪魔は優雅に微笑んで評する。

「あの娘はわたしとモモンガ様の隠し子……冗談だから、アウラはその鞭を仕舞うでありんす」

銀髪の真祖は余裕の態度を崩さない。

剣呑な視線を友人に送っていたアウラと呼ばれた人物は、溜め息をつくときれた様子

で机に突っ伏した。

白いパンツルックに赤い胴衣、革の靴とグローブという活発な格好だが、アウラは少女である。

代わりに口を開いたのは、尻尾を生やした赤いスーツ姿の長身の男。

「そういえば、下賤から成り上がった王は手の届かなかつた貴族の姫を望み、高貴な出自の王は珍しさから身分の低い女に手を出すとか」

「デミウルゴス、何が言いたいの？」

「そうでありんす。わたしを差し置いて、小娘の吸血鬼など——」

「拾われた娘が愛人になり、やがて正妃になった例は枚挙にいとまがありませんよ」

その言葉が放たれた瞬間、彼より先に発言した二人から殺気が広がり、空気が凍って重くなった錯覚がした。

だが、場にいた五人は微動だにしない。

息を乱すことなく涼しい顔で受け流し、あるいは呆れて取り合わなかった。

この程度でジタバタするような小物は居ないのだ。

そこへ今まで発言していない人物が、凍える空気を破った。

気弱そうな外見の魔法詠唱者だが、内面は同じとは限らない。

実際その行動こそが、二人の殺気など物ともしていない証でもある。

「あの娘の事どうするんですか？　いくらモモンガ様のお気に入りでも、好き勝手にされるのはいけないと思います」

女装した魔法詠唱者の意外に強い発言に、あれ？　と彼の姉は首をかしげ——ああ、成る程と破顔した。

魔法詠唱者の少年がナザリック地下大墳墓に訪れる際、玉座以外で必ず寄る場所がある。

第十階層内にある巨大図書室『アッシュユールパニバル最古図書館』。

話題に上がる新参の娘はそこにある小部屋を与えられ、アンデッドの職員たちと共に死霊——もとい、資料整理や魔法研究に携わっていた。

司書長テイトウス・アンナエウス・セクンドウスの覚えも良く、魔法道具の作成にも協力をしている。

故に少年は娘と遭遇する機会があるのだろう。

見れば少年は、左手の薬指に嵌めた指輪を右手で押さえている。弟が抱いている感情を思いやり、姉は事態の解決に動いた。

「じゃあ、デミウルゴスはどうしたら良いと思う？」

「私たちの中から見極める代表者を出すべきだと思うね」

「そうね、私が責任を持って——」

「わたしの出番でありん——」

「君たち二人に頼むつもりは毛頭ない。コキュートスとセバス、頼まれてくれるかい？」

「承知シタ」

「畏まりました」

「……意外。あたしに頼むかと思つた」

男装少女の発言に男は肩をすくめて見せる。

「アウラ、君とマーレには私と共に当日この二人の監視を頼みたいんだ。勝手な真似で

見極めを邪魔されても困るからね」

「ああ、そういうことか。もの凄く納得したよ……」

装備アイテムで感じないはずの疲労感を覚えて、少女は再び机に突っ伏した。

※ ※ ※

清掃が隅々まで行き届いた広く美しい廊下を歩む。

ナザリツクに属する面々が、この世で最も神聖で偉大な場所に繋がる場所と考える第

十層の回廊。

進む影はサトルを入れて四つ。

キーノは借りてきた猫のように大人しい。

ナザリック最強の武器攻撃者と格闘戦闘者の二極がつき従っているのだから、仕方が無いとも言える。

玉座に居る訳でなく、単なる移動だから雑談の一つでも問題ないのに。

そんなサトルの念が届いたのか、筆頭執事セバスが優しく少女に話を振った。

「昨晚キーノ様は大図書館のお部屋にいらっしやらない様子でしたが、どちらにいらしたのでしょうか？」

「サト……モモンガ様の部屋にずっといたよ」

「……………」

何だこの空気。

夜通し『黒ひげ危機一髪』をしていたのは確かだが。

「何故ズットイタノカ聞イテモ？」

「モモンガ様が中々帰してくれなかったから……」

「……………!？」

勝ち逃げを許さなかっただけで、あれ？ おかしいぞ。

二人ともどうして黙る？

おいセバス。今、俺からそっと目を逸らしたのは何故だ。

「ナ、何ヲシテイタカ聞イテモ？」

言つても良いの？ と目でキーノが問うので、サトルは無言で頷く。

少女は何度も敗北した自分を氣遣つたのだろう。

確かに主人としての体面もあるが、変に隠す方が誤解の種になる。

じゃあ、とキーノが口を開いて――

「あのね、えつと……確か『近こう寄れ、ひぎい一発』って、ずぶつと何度も刺して、勢い良く吐き出させるゲームを夜通し……」

死の絶対支配者、及び100レベルNPCを硬直させる偉業を達成。

NPC二人の少女に対する印象が、すっかり一変したのは言うまでもない。

※ ※ ※

何とか誤解を解きつつ、サトル達は玉座の間に辿り着いた。

「勿論です。心得ております」

「理解シテオリマス。コノ事ハ、内密ニシマストモ」

二人の返答に少し不安を覚えるが、解かってくれたと信じたい。

ここからは、コキュートスから合同会議の代表として——毎回六人で交代する仕組みで今回は彼の当番だ——大陸支配に関する報告・相談。

セバスは中立の立場から同席した証人と補佐・訂正。

キーノは現地人の視点として、生じた疑問・対策のオブザーバーである。

いつも玉座に控える一般メイドは下がらせた。

彼女たちの忠誠を疑う訳ではないが、ここから交わされる会話は大陸支配における最重要機密。

万が一の可能性を考えると、戦闘力のないメイドに追わせる責として釣り合わない。

「……そうか、いつもながら良くやってくれている。コキュートスよ、何か褒美は要らないか?」

「モモンガ様カラ頂イタ物ナラ、何物デモ褒美ニ成リマシヨウ。デスガ——」
「私の世継ぎか。それは……」

ああ、やはり誤解は解けていなかったらしい。

先のキーノの発言があつて、コキュートス達は彼女を愛妾と認識したのだ。
さて、どうしたものか。

いつその事、不明瞭な少女の立場を確立させるか?

しかし、彼女への好意はあるが、自分とキーノは子供を授けることも、授かることも出来ない身体なのだ。

その事実を明かさない場合。

彼らの異常に高い忠誠心を考えれば、サトル自身に当たる風は生まれない。子を為せない非難の嵐に晒されるのは、間違いなくキーノの方——

「えっ？ コキユートスさんは、サト……モモンガ様の赤ちゃんが生まれて欲しいの？」

太陽の笑顔を持つ吸血姫。

その無邪気で明るい声がサトルの曇る考えを晴らす。

「私、モモンガ様の子ども産めるよ？」

死の絶対支配者^{オーパーロード}、及び100レベルNPCを硬直させる偉業、二回目。

一瞬、衝撃に凍った凍結の支配者^{コキユートス}が不敬と思いつつ、偉大な主人へ視線を向けると、ぶんぶんと首を振って潔白を訴えていた。

きつとアレだ。

コウノトリとかキャベツ畑とか、性の知識のない幼女が発する、根拠のない発言。

ママゴトで人形を赤子に見立てて、お母さんぶる小さな母性。

「えつと……私、サトルとあんな事したでしょう？」

『……アンデッドへと変化すると、心も歪む場合が多い。理想に燃え、それを叶えるための手段であつたはずが……』

スレイン法国の洗礼名『ファスリス』を持つ幼い少女と儀式に関わつた者たちが望んだのは、理想を叶える為の手段。

<死の螺旋>は失敗魔法儀式ではない。

本当の魔法儀式の名前は——

「私はサトルしか吸つてないから、本当にサトルと私の子どもだよ!？」

相手が無言の様子を見てキーノが焦りを見せた。

慌てる余り、モモンガ様が抜けてサトルの呼び捨てになつてゐる。

その様子がコキュートスやセバスの目には違う形に映つた。

神に等しい偉大なる主人の真名を用いてまでの訴え——少女の発言は真実なのだ。

余談だが、吸血姫の吸愛のキス。

後に地下大墳墓で働くホームクルス、純粋な一般メイド達には、『男の人とキスをする
と赤ちゃんができる』と噂になつた。

「ああ、本当つすよ? 異性と粘膜接触したらデキちやいますからね」

狼少年……もとい、狼神官の口添えが拍車を掛けたという。

「オメデトウゴザイマス、モモンガ様！」

我が事のように——いや、念願の守り役の実現が近づき、コキュートスが歓喜の声を上げる。

続けてセバスが祝福の口上を述べた。

二人に対し、サトルは無言で右手を上げることで返事を送る。

余りにも衝撃が強すぎて、まだ実感が湧かないのだ。

これから先に待つ未来は、まさにサトルの未知のものばかり。

知人・友人ではない。

長年持っていなかった『家族』。

サトルの世界が一変するであろう、まさに世界を担う一員（一因）だ。

太陽の温かさを持つ少女。

彼女の身が育む闇の御子。

昼と夜——世界の半分同士が揃って、サトルの前に在る。

何か欲しいものはあるか？

精神抑制の制御に感謝しながら、じつと自分の反応を待ち続ける少女に尋ねる。

しばし思索した後、彼女の目に強い意志が宿った。

「欲しいものじゃなくて、お願いなんだけど——」

前置きから漂う、これだけは絶対に引くつもりはないという決意。

キーノが強い口調でサトルに応える。

「赤ちゃんの名前、私に決めさせてね？」

てつきり「絶対産むから！」と来ると思ったが、もはや彼女の中では決定事項なのだ。サトルが不意に笑いだした。

明るい笑い声に主人の喜びを感じて、守護者と筆頭執事は改めて慶事に目を細める。

キーノ・ファスリス・インベルン。

彼女が次にサトルと旅へ出るのは『ハネムーン 蜜 月 』。

あるいは小さな姫を連れた三人の初旅行。

どうやら『キーノの旅』は、まだまだ続いていくようである。

） F i n （

【完結あとがき】

長々とあとがきを読むのが嫌いな方。

読後感を邪魔されたくない方も居られると思うので隔離して。

読み飛ばしOKです。

つい、アインズ様と書きそうになり、何度かモモンガ様に書き直しながら無事に終了。読了ありがとうございます。

Web版の設定だと、イビルアイの吸血姫（ヴァンパイアプリンセス）は種族スキルで、シャルティアと同じく吸血鬼10レベルを土台にした上位クラス。

ですが、書籍版になって吸血姫は職業スキルへ変更になっています。

上位吸血鬼の互換でなく、シャルティアの真祖との差別化。

これが私の最終回テーマでした。

イビルアイと“死の螺旋”の関連はコミック版3巻のコラムをご覧ください。

もちろん、“死の螺旋”の解釈は私の勝手な妄想ですので外れの可能性大です。

正直イビルアイのタレント（吸血姫になった原因）は想像つきませんでしたし、アニメ円盤の特典小説が無ければここまで書けなかった。

原作小説は勿論ですが、あのアインズ・ウール・ゴウン誕生の特典小説が面白かったから、自分も突き動かされたのが本音です。

では、最後に謝辞を。

ふたばのオーバードスレでキツカケを書き込んだ、としあき様。

ハイ、ほんの軽い気持ちで手を出したんです。

ここまで長くなるとは予想しませんでした。

ハーメルンにまとめては？ と助言を下された、としあき様。

最初はハーメルンに投稿する予定もなかった……というか、ここの存在を知らないレベルでした。

告白すると、今でも投稿機能が把握できてなかったり。

漫画やイラスト化して下さった、たらかん様。

ふたばスレに投下されていた絵も含め、永久保存させて貰いました。

自分のネタを差し引いても、それ以上に可愛く描いて下さって心から感謝を。

これからも一ファンとして応援しつつ収集させて頂きますね。

読んで頂いた皆さま。

最後まで拙作におつき合い頂き、ありがとうございます。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

作っている自分の方は、間違いなく楽しかった。

これでいつの日か「楽しかったんだ……」ネタ再現の準備は完了です。
最後は偉大なる原作へ。

五月末の最新刊、本当に楽しみです。

もう予約は済ませた！

既刊を再読しつつ、指折りで待機しております。

以上。

とりあえず、SS書き終わるまで封印していた積み本や録画アニメを消化するつもり。
り。

漫画『初恋ゾンビ』や『女王陛下の補給線』の単行本、ラノベ等沢山ありますから。

次回作はあくまで予定ですが、クレマンティーヌの漆黒聖典時代の話を考えています。
す。

タイトルは『破滅への階段（仮）』。

長編でなく短期連載ぐらいの、楽な形式で歪んだおねショタ……げふんげふん。